

平成17年度 報告書

橘・東和地域連携型中高一貫教育

～豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり～



山口県立安下庄高等学校
周防大島町立安下庄中学校
周防大島町立日良居中学校
周防大島町立東和中学校

目 次

はじめに	3
1 地域の概要	3
(1) 橘・東和地域の特色	3
(2) 本地域の目指す中高一貫教育	4
(3) これまでの取組み	4
2 実践研究の概要	6
(1) 実践研究課題	6
(2) 実践研究組織	7
(3) 実践研究の経過	8
3 実践研究の成果及び課題	10
(1) 「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」の取組み	10
ア 中高で連携した特色ある教育課程の編成	10
○ 中学校における各教科年間指導計画の共通化	10
○ 中学校における多様な選択教科	11
○ 高等学校における習熟度別少人数指導	13
○ 高等学校における多彩なコース・系列の設置	13
イ 中高教員による指導方法の工夫・改善	14
ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック	18
エ 「安下庄高校が求める5教科の力」の改善	21
オ 6年間を見通した計画的な資格取得	23
カ 中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の取組み	24
(2) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組み	25
ア ねらい	25
イ 中学校における取組み	25
ウ 高等学校における取組み	26
エ 評価について	27
オ 成果と課題	28
カ 今後の展望	28
(3) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組み	28
ア ボランティア活動	28
イ イングリッシュキャンプ	30
ウ ふれあいマラソン大会	30
エ ふれあいみかん収穫作業	31
オ 私の主張・郷土おおしま発表大会	32
カ ハワイ・カウアイ島修学旅行	33
(4) 「6年間を見通した進路指導」の取組み	36
ア 進路指導目標	36
イ 中高6年間の指導計画	36
ウ 取組み	37
エ 成果と課題	38
オ 今後の展望	38
(5) 「6年間を見通した生徒指導」の取組み	39
ア 生徒指導目標	39

イ	中高6年間の指導計画	39
ウ	生徒指導年間計画	41
エ	取組み	42
オ	成果と課題	45
カ	今後の展望	45
(6)	各教科での取組み	45
ア	国語科	45
イ	社会科	46
ウ	数学科	47
エ	理科	48
オ	英語科	52
カ	音楽科	54
キ	保健体育科	55
ク	情報科	58
(7)	部活動における取組み	59
ア	取組み	59
イ	アンケート実施とその結果	59
ウ	成果と課題	61
	おわりに	64
	参考資料	65
I	橘・東和地域中高一貫教育 教育課程(平成14年度～平成17年度)	65
II	安下庄高校が求める5教科の力 2005	68

はじめに

本地域で平成13年度より“豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり”を基本コンセプトに掲げて連携型中高一貫教育が開始され、5年が経過した。開始と同時に文部科学省から「中高一貫教育開発指定校」の委嘱を受け、既設校でなければ解決できない課題等について、実践的な研究を行ってきた。また、平成16年度からは「中高一貫教育改善充実研究事業」の指定を受け、さらなる発展・充実を目指して様々な取り組みを行い、研究を深めてきた。

昨年度は4校合同による学校行事を発展・改善させるために、各行事の準備段階での役割分担や、運営面についても活発な議論がなされた。また、中学校終了時における基礎学力の定着をより一層図り、中学校から高校への学習の橋渡しをよりスムーズに展開させるために、5教科の教員を中心に「安下庄高校が求める5教科の力」も作成した。さらに、一昨年度まで実施していた「ふれあいクリーン作戦」に代わる「ボランティア活動」の開始など、新たな取り組みが行われた。

本年度は、安下庄高校が中高一貫教育を実施して以来取り組んできた、一人ひとりの学力の充実を目指したシステムの検証を中高教員で行った。教員の異動により新しく他校から着任した先生方に対し、連携3中学校における年間指導計画の共通化や、単元・定期テストおよび日々の授業におけるフィードバックのあり方や、定期テストの共通化の意義などをあらためて説明し、中高一貫教育開始当時の熱い思いを中高の全教員で再確認した。また、連携型中高一貫教育を進めていく中で、開始当時には見られなかった様々な問題について、中高教員相互の協議を重ねて一つ一つ解決して進んでいる。

1 地域の概要

(1) 橋・東和地域の特色

本地域は瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島）の東部に位置し、豊かな自然に恵まれた環境の中でみかんを中心とした農業と漁業の盛んな島である。本州と島を結ぶ大島大橋が開通してから、島で暮らす人々の生活の変容ぶりには目を見張るものがあるが、澄んだ空気と、のどかな雰囲気は今も昔も変わらないままである。

本地域では、島の中央に位置する山口県立安下庄高等学校と近隣の周防大島町立安下庄中学校・日良居中学校・東和中学校の3中学校が平成13年度から県内初の連携型中高一貫教育校としてスタートし、5年が経過した。

本地域は日本中を旅した民俗学者・宮本常一の出身地であり、故人の遺志を継ぐ動きとして、学びの場である『郷土大学』の講義が定期的に行われている。また、平成16年にオープンした周防大島文化交流センターには、宮本常一が残した膨大な数の写真のデジタルデータが保存されており、宮本常一の足跡を全国に発信している。この宮本常一の研究手法を学ぶことによって、子供たちがより深くふるさと大島について学び、大島を愛する心を育てることを試みている。

また、地域住民の学校教育に対する関心の高さは、安下庄高等学校の前身である旧制安下庄中学校が全国でも珍しい町立中学校として創立した歴史があることからもうかがえる。町当局の学校教育への理解も深く、地域の教育力で学校が支えられている。

なお、大島郡では、昭和38年にハワイ州カウアイ島と姉妹島縁組みを結んでおり、平成10年度から安下庄高校の2年生がハワイ修学旅行を実施するなど、ハワイ州との交流が盛んである。

平成16年10月1日に大島郡の4町が合併して、周防大島町として新たに動き始めた。近年の少子化と若者の流出により高齢化の一途を辿ってはいるが、高齢者の福祉制

度の充実やブロードバンド化の推進、周防大島町の良さを再発見する様々なイベントが企画されるなど、高齢者にとって住みよい、活力に溢れる町である。

(2) 本地域の目指す中高一貫教育

○ コンセプト

豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり

○ コンセプトを実現するための3つの柱となる教育活動

- 1 一人ひとりの学力の充実をめざす教育
- 2 6年間を見通したテーマ学習
- 3 体験的な学習を重視した学校行事

本地域の中高一貫教育における基本コンセプトを実現するための三本柱として設定された「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」、「6年間を見通したテーマ学習」、「体験的な学習を重視した学校行事」を研究テーマの中心に据えた。さらに、「6年間を見通した進路指導」や「6年間を見通した生徒指導」にも取り組み、様々な成果をあげるとともに課題の再検討を行ってきた。

本年度も引き続き、上述の研究テーマをより一層深めるとともに、今までの取組みを見直すために、年度当初から各教科部会や各分掌部会で研究課題を設定し、研究や実践を行った。

(3) これまでの取組み

ア 一人ひとりの学力の充実をめざす教育

- 生徒一人ひとりの学力の充実をめざす教育システムの構築（図1参照）
- 中高6年間を見通した特色ある教育課程の編成
 - ・ 中学校における各教科年間指導計画の共通化
 - ・ 中学校における多様な選択教科の開設
（「BS (Basic Study)教科、SS (Skill Study)教科、ES (Expression Study)教科」）
 - ・ 高等学校第1学年の国語・数学・英語における習熟度別少人数指導の実施
 - ・ 高等学校第2学年から、生徒の個性や進路に応じた多様なコース・系列の設定
- 中高教員による指導方法の工夫改善
- 中学校における交流授業で高校教員による単独指導の試み
- 基礎学力の定着度の確認方法及び指導方法へのフィードバック
- 「安下庄高校が求める5教科の力」の作成および活用方法の工夫・改善
- 6年間を見通した計画的な資格取得
- 連携中学生の中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の実施（数学科・英語科）

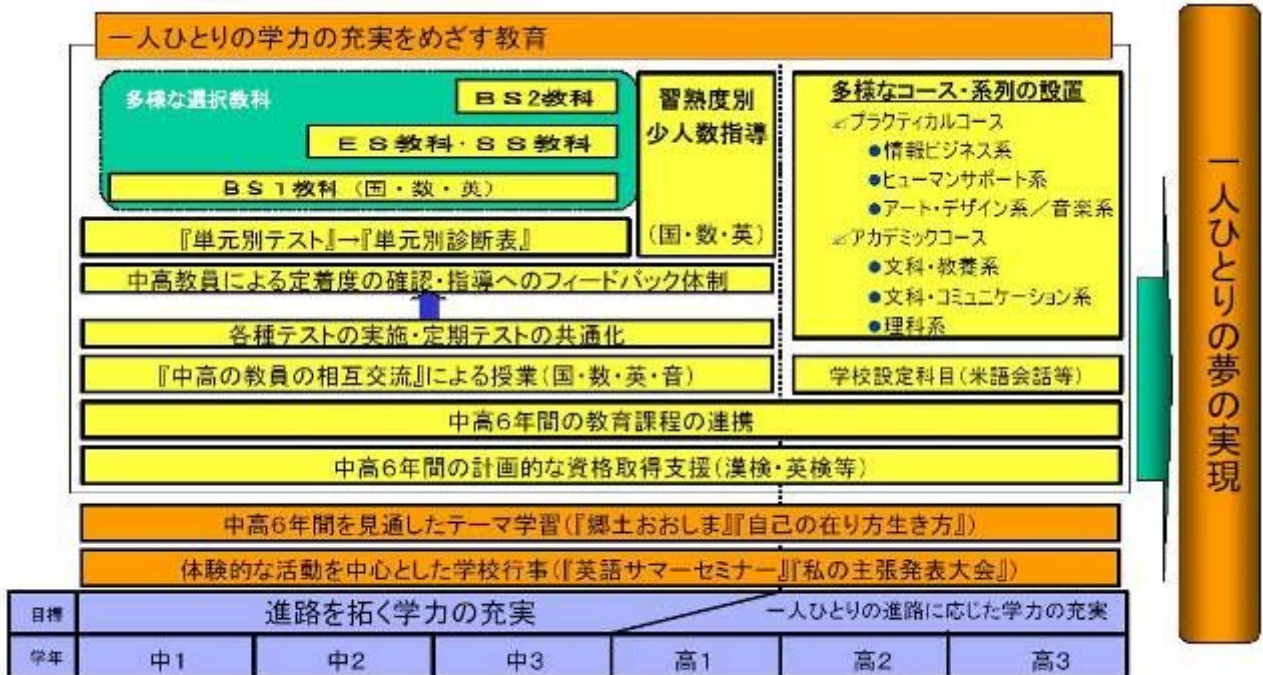


図1 基本コンセプトを具現化するための教育システム

イ 6年間を見通したテーマ学習(「郷土おおしま」の取組み)

- 学年に応じたテーマ学習の指導法及び評価法の研究
- フィールドワークを取り入れた調査方法の研究

ウ 体験的な学習を重視した学校行事

- 地域との連携を図りつつ、生徒の主体的な取組みを充実させる工夫
- 異年齢集団の中での円満な人間関係の育成
- 中高担当教員による役割分担の明確化と協力体制の強化

エ 6年間を見通した進路指導

- 中高6年間を見通した年間指導計画の作成
- 生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、主体的に進路決定を行うための段階的・継続的な支援
- 中学生を対象とした体験入学・キャリアセミナーの実施・充実

オ 6年間を見通した生徒指導

- 高校生を対象とした、中学校教員・養護教諭によるカウンセリング活動の実施
- 中高6年間の各クラスの学級経営方針・基準の統一への取組み
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力や、コミュニケーション力・表現力の向上
- 各種合同行事における、異年齢集団の中での人間関係づくりへの支援

2 実践研究の概要

(1) 実践研究課題

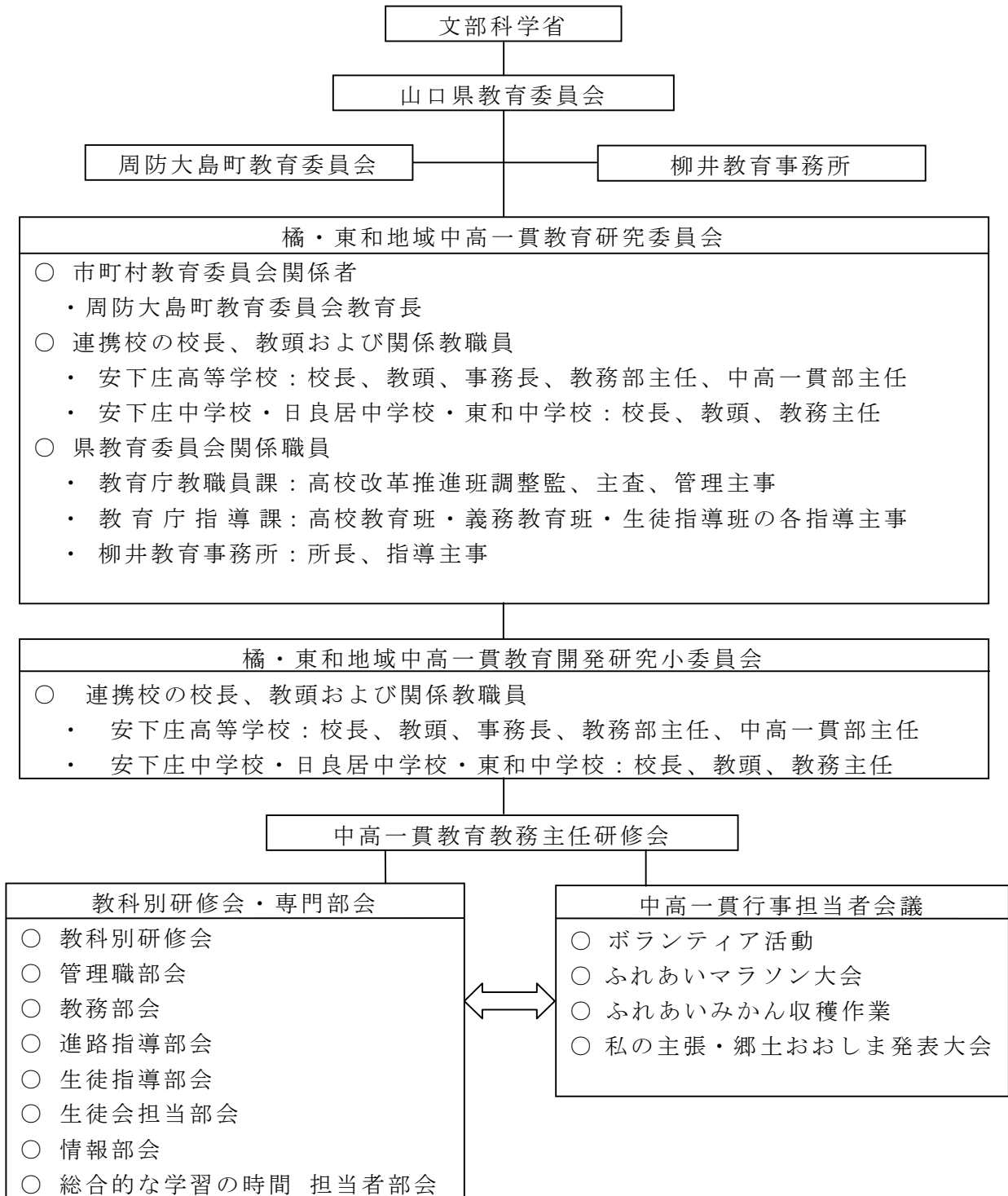
- 生徒一人ひとりの学力を向上させる学力充実システムの再検討
- 中学校修了時の学力を確認するための「安下庄高校が求める5教科の力」の改訂および活用方法の工夫・改善
- 体験的な学習を重視した学校行事の発展・充実と、準備段階における中高の協力体制の強化

本年度は、従来の様々な取組みを継承しつつ、同時に、生徒一人ひとりの学力の充実をめざす教育システムの改良点や再検討事項を絞り込んだ。まず第一に、中高一貫教育の開始以来、本地域の生徒一人ひとりの学力を向上させるために取り組んできた学力充実システムについて、変更すべきものと変更すべきではないものについて、中高教員による合同職員会議を実施して協議し共通理解を図った。特に定期テストの共通化と教科別診断票の作成については、その導入の経緯を全中高教員に説明し、その後の教科別研修会でも十分に協議し、理解を一層深めた。第二に、以前からの課題であった「基礎学力の定着度の確認方法及び指導方法へのフィードバック」の実践についても、蓄積してきたデータを使った新たな資料の作成に向けた検討を始めた。

また、昨年度は、中学校修了段階での中学生の学力を確認できるようにするため、「安下庄高校が求める5教科の力」（通称；ガイドライン）を5教科で作成し、中学校卒業時の学力の確認と、高校での学習を始める上での指針として活用していくことを目指した。今年度は、年度当初より各教科において改訂作業に取り掛かり、中学校教員の意見や、実際に中学生が使ってみた様子を参考にして、より一層中学生に活用しやすくなるように取り組んだ。活用方法についても、中学3年生の3学期の時期だけではなく、「ゆとり」を生かした学習会や、中学校における交流授業で高校教員が単独指導を行い、その中でガイドラインを意識した授業を展開するなど、徐々に活用の幅を広げている。

さらに、中高一貫教育にかかる各種合同行事において、中学校と高校での意見交換を活発にし、協力体制を一層進めるために、準備段階から中学校と高校とで役割分担を明確化し、中高の担当教員が協力して学校行事を運営できるように工夫した。また一昨年度から始まった「ボランティア活動」については、中学校・高校がそれぞれの地域の中で行うことができる身近なボランティアに積極的に取り組もうとする体制が出来つつある。このボランティア活動を充実させる上で、どれだけ中学校と高校との情報交換や連携をスムーズに行うことが出来るかが重要な鍵となっている。

(2) 実践研究組織



(3) 実践研究の経過

平成17年度

- 4月5日 ○第1回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（安下庄高校；4校の全教職員が参加）
◇第1回管理職連絡調整会議
◆第1回教務部－中高一貫教育部主任会議
- 4月19日 ・山口県立美祢高等学校との交流研修打ち合わせ
- 4月26日 ◆第2回教務部－中高一貫教育部主任会議（安下庄中学校；4校の教頭も出席）
- 4月27日 ・山口県立美祢高等学校（連携型中高一貫教育校）1年生との交流研修
- 5月9日 ☆中高教員の相互交流授業（1学期）開始
- 5月10日 ・連携中学校教員によるカウンセリング活動（安下庄中学校教諭が来校）
- 5月12日 ・連携中学校教員によるカウンセリング活動（日良居中学校教諭が来校）
- 5月13日 ・連携中学校教員によるカウンセリング活動（東和中学校教諭が来校）
- 6月1日 ・第1回「ボランティア活動」担当者会議（安下庄高校）
- 6月2日 ◆第3回教務部－中高一貫教育部主任会議（東和中学校）
- 6月8日 ・総合的な学習の時間（安下庄高校）特別講義：「フィールドワークの進め方～宮本常一に学ぶ～」 「大島の産業；みかん」 「大島の歴史；弥生時代の遺跡、村上水軍」
- 6月13日 ○第2回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（橘総合センター）
- 6月13日 ・総合的な学習の時間（安下庄中学校） 「宮本常一先生の研究手法を学ぶ」
- 6月17日 ・総合的な学習の時間（日良居中学校） 「宮本常一から学ぼう」
- 6月20日 ・総合的な学習の時間（日良居中学校）講演会「自己の在り方生き方」
- 6月22日 ◆第4回教務部－中高一貫教育部主任会議（安下庄高校）
- 6月26日 ・大島郡陸上競技大会での補助員ボランティア（東和中学校）
- 6月28日 ・第1回「総合的な学習の時間」担当者会議（安下庄高校）
- 6月28日 ・高等学校教育研究会数学会の柳井地区連絡協議会で中高交流授業を公開
- 7月5日 ・周防大島町立和田小学校との逗子ヶ浜の清掃活動（東和中学校）
- 7月8日 ・第1回「ふれあいみかん収穫作業」担当者会議（安下庄高校）
- 7月9日 ・一日体験入学（安下庄高校）…「オープンキャンパス in 安高」
- 7月15日 ◎第1回橘・東和地域中高一貫教育研究委員会（安下庄高校）
- 7月25日 ◆第5回教務部－中高一貫教育部主任会議（安下庄中学校）
- 8月8日 ○第3回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（橘総合センター、安下庄中学校）
◇第2回管理職連絡調整会議
◆第6回教務部－中高一貫教育部主任会議
- 8月9日～11日（夏期休業中随時） ・イングリッシュキャンプ（英語サマーセミナー）…橘ウインドパーク
・各種ボランティア活動実施（花火大会、24時間テレビなど）
- 9月10日 ・日良居中学校秋季大運動会におけるボランティア活動（安高生1年7名が参加）
- 9月13日 ☆中高教員の相互交流授業（2学期）開始
- 9月15日 ・総合的な学習の時間（東和中学校） 「宮本常一先生に学ぶ」
- 9月22日 ◆第7回教務部－中高一貫教育部主任会議（日良居中学校）
- 10月4日～9日 ・ハワイ・カウアイ島研修旅行
- 10月13日 ・連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（安下庄中学校養護教諭が来校）
- 10月14日 ・連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（日良居中学校養護教諭が来校）
- 10月17日 ○第4回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（日良居中学校；4校の全教職員が参加）
◇第3回管理職連絡調整会議
- 10月18日 ・連携中学校養護教員によるカウンセリング活動（東和中学校養護教諭が来校）

- 10月19日 ・ 中高一貫保健体育部研修会（安下庄中学校）
- 10月25日 ・ 第2回「ふれあいみかん収穫作業」担当者会議（安下庄高校）
- 10月27日～ ・ 安下庄高校教員による東和中学校での進路相談会（～28日、31日、11月1日、2日）
- 11月5日 ・ 安下庄中学校・日良居中学校文化祭におけるハワイ・カウアイ島研修旅行の体験発表
- 11月12日 ・ 東和中学校文化祭におけるハワイ・カウアイ島研修旅行の体験発表
- 11月16日 ・ ふれあいマラソン大会（終了後ふれあいみかん収穫作業参加生徒の打ち合わせを実施）
- 11月21日 ◎第2回中高一貫教育研究委員会（東和中学校）
 - ◆第8回教務部－中高一貫教育部主任会議
- 11月21日 ・ 総合的な学習の時間（日良居中学校）在り方生き方講演会
- 11月30日 ・ 第1回「私の主張・郷土おおしま」発表大会担当者会議（東和中学校）
- 12月5日 ・ 第2回「ボランティア活動」担当者会議（安下庄中学校）
- 12月9日 ・ ふれあいみかん収穫作業
- 12月26日 ◆第9回教務部－中高一貫教育部主任会議（安下庄高校）
 - ・ 高校3年生進路内定者によるキャリアセミナー（安下庄中学校）
 - ・ 高校3年生進路内定者によるキャリアセミナー（日良居中学校・東和中学校）
 - ・ 「私の主張・郷土おおしま」発表大会
- 1月16日
- 1月19日
- 1月27日
- 1月30日 ◆第10回教務部－中高一貫教育部主任会議（安下庄高校）
 - ・ サザンセトロードレースにおけるボランティア活動（東和中全校生徒、日良居中生徒4名、安高生3名が参加）
- 2月5日
- 2月8日・9日 ・ 連携型中高一貫教育に係る入学者選抜
- 2月13日 ・ 坂野慎二氏（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 総括研究官）、中高一貫教育に関する聞き取り調査のため連携4校を視察
- 2月20日 ◎第3回橘・東和地域中高一貫教育研究委員会（安下庄高校）
- 3月3日 ○第5回橘・東和地域中高一貫教育合同研修会（安下庄高校；4校の全教職員が参加）
 - ◇第4回管理職連絡調整会議
 - ◆第11回教務部－中高一貫教育部主任会議
- 3月14日 ・ 日良居中学校において、高校教員とのT・T指導を実施。
- 3月17日 ・ 連携中学校の安下庄高校入学予定者を対象とした、ゆとりを生かした春休み学習会①
- 3月22日 ・ 連携中学校の安下庄高校入学予定者を対象とした、ゆとりを生かした春休み学習会②

3 実践研究の成果及び課題

(1) 「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」の取組み

“豊かな自然環境の中で、一人ひとりの夢を実現する学校づくり”という基本コンセプトを実現するための重要な3本柱のひとつが「一人ひとりの学力の充実をめざす教育」である。それをその他の2本の柱、すなわち、「中高6年間を見通したテーマ学習」と「体験的な学習を重視した学校行事」の取組みとともに推進していくことによって、生徒の「生きる力」を育み、ひいては生徒一人ひとりの夢を実現させることをねらっている。

ア 中高で連携した特色ある教育課程の編成

○ 中学校における各教科年間指導計画の共通化

(ア) 取組み

- 連携3中学校の各教科の年間学習指導計画の共通化
- 定期テストの共通化に対する中高教員の共通理解の徹底
- 定期テストにおける共通化部分の精選化と評価規準の共通化

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 定期テストの共通化の導入とそのねらいについて、中高教員での共通理解を図ることができた。○ 高等学校を含めた連携校間での教科研修の機会が増え、指導方法の工夫など、研修意識が高まり、共通の課題や指導上の問題点を多角的に分析することができた。○ 基礎学力の定着度の確認および生徒の学習のつまずき箇所の発見が容易になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 今後さらに定期テストの共通化部分についての分析を進め、日頃の授業活動にフィードバックできるよう、指導の質的向上を目指し、より一層努力をしなければならない。○ 年間指導計画を学校・教科間で再確認し、計画的な指導の徹底を図る必要がある。

(ウ) 今後の展望

指導計画の共通化が始まって5年目になり、定期テストや指導計画の共通化が定着してきた。しかし、中高の教員一人ひとりがもう一度出発地点に立ち戻り、日々の授業実践における指導の質的向上をねらった当初のねらいを考え直すとともに、教科ごとに十分な協議を行い、年間指導計画や定期テストの共通化に関する研究や実践をより発展させる必要がある。

また、より有効的な分析を進めるために共通化する部分を絞り込み、分析した結果を日頃の授業活動にフィードバックすることも踏まえて授業に取り組んで行くことが必要になってくると思われる。

○ 中学校における多様な選択教科

(ア) 取り組み

- B S (Basic Study) 教科における、必修科目の補足的な学習の実施
- S S (Skill Study) 教科における、生徒の個性や特性の伸長
- E S (Expression Study) における生徒の自己表現能力の育成

B S 教科は、B S 1 と B S 2 に分けて実施し、必修教科の補足的学習に重点を置き、基礎学力の定着をめざしている。B S 1 教科については、国語・数学・英語の 3 教科を開設し、1 学年で 30 時間、2 学年で 35 時間、3 学年で 35 時間実施した。また、B S 2 教科については、社会・理科の 2 教科を開設し、3 学年で 35 時間実施した。

S S 教科では、音楽・美術・保健体育・技術家庭科等の教科を開設し、生徒の個性や特性を伸ばすことをめざした。

E S 教科においては、「表現活動」に重点をおき、生徒の自己表現能力を高めることをめざしている。

E S 教科では、高等学校の教育課程を見通し「情報」・「英会話」・「表現」の教科を開設した。「情報」では、I T 関係の学習を中心に実施し、情報収集やプレゼンテーション能力を養うとともに、学校生活をはじめ生活全般の中で、コンピュータを積極的に活用する態度を養う。「英会話」では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとともに、英語で自己表現する能力を高める。「表現」では、国語だけでなく音楽・美術・保健体育等の教科まで幅を広げ、さまざまな自己表現能力を養う。(表 1 参照)

教 科		内 容
B S 1	国 語	・基礎・基本の定着を図るための漢字学習・作文学習や劇、言葉遊び等の取組み ・教員作成の教材の活用
	数 学	・必修数学の復習や、基本問題を中心とした学習
	英 語	・単元テストや定期テスト等であつまずいた内容の繰り返し学習
B S 2	社 会	・必修社会の復習や教員作成の教材の活用
	理 科	・興味・関心を持たせる実験や問題集を利用した基礎・基本を定着させる学習
S S S	音 楽	・ギターや管楽器・ピアノなどの演奏技能の修得とアンサンブル
	美 術	・各自が選んだ制作方法での作品づくり
	保 体	・バドミントンやレクリエーションスポーツなどを通して運動の基礎を修得
	技 術	・決められた材料を利用した作品づくりや、コンピュータの基礎的な学習
E S S	情 報	・インターネットを利用して情報を収集し、その資料をもとにプレゼンテーションを行うなど、コンピュータを活用した学習
	英会話	・ビデオ視聴・クイズやゲームによる基本的な日常会話の学習や、Eメールを利用して海外の学校と交流 ・ALTや高等学校教員とTTで実施
	音 楽	・民俗芸能ケチャの表現や手拍子でのリズム創作やアンサンブル、和楽器演奏や歌唱の取組み
	美 術	・各自の課題に基づく創作活動
	保 体	・ダンスやボディーパーカッションによる身体表現活動

表 1 中学校における多様な選択教科

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
○ 生徒一人ひとりの能力を活かせる場面が多くなり、生徒の学習意欲が向上した。	○ 指導内容や指導方法については、通常の授業との関連や位置づけも再検討する必要があると思われる。

(ウ) 今後の展望

それぞれの選択教科で身に付けさせる基礎学力やねらいを明確にし、生徒・教員ともに十分に理解して授業に取り組むことが重要になると思われる。そして、単なる通常授業の補完的な役割としての選択教科ではなく、BS・ES・SSのそれぞれの選択教科について担当教員で十分な協議を重ね、生徒の興味・関心を高める取組みが行われることが大切である。

○ 高等学校における習熟度別少人数指導

(ア) 取組み

- 高等学校1年生を対象に、国語総合（古典分野）、数学Ⅰ・数学A、英語Ⅰで実施
- 1学年2クラスを合併させ、生徒の理解度・到達度に合わせて、発展クラス（1クラス）と基礎クラス（2クラス）に分けて授業を展開
- 数学・英語において、週一回程度、連携中学校の教員が高等学校を訪れ（数学3名、英語1名）、ティーム・ティーチング（T・T）により、きめこまかな指導を展開

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 生徒の到達度に合った内容を学習させることができ、個人指導の時間もとれるので、大変有効である。○ 中学校教員のアドバイスにより、生徒がつまずきやすい箇所を事前に予想し、重点的に補足説明等を行うことが出来る。	<ul style="list-style-type: none">○ 基礎・発展の2段階による習熟度別学級編成では、生徒の理解度の差が大きく、生徒の学力差や個性に対応した指導を行うためにも、可能な限り弾力的な学級編成が必要である。

(ウ) 今後の展望

生徒一人ひとりの学力を向上させる手段として習熟の程度に応じて授業する方法は有効であると思われる。しかし、基礎・発展の2段階による習熟度別学級編成では、まだまだ生徒の理解度の差が大きいように思われる。基礎基本を重点的に指導していくことと同様に、基本事項を基に応用力を身に付けてより発展的な学習を進めていくためにも、2段階の学級編成を3段階に細分化し、よりきめ細かな習熟度別少人数指導を実施していくことも検討する必要がある。

○ 高等学校における多彩なコース・系列の設置

(ア) 取組み

- 生徒の進路や興味・関心及び保護者のニーズの多様化に対応するために、平成14年度入学生の2年次の教育課程から2コース・6系列を設置（図2参照）
 - ・「アカデミックコース」では、上級学校への進学をめざし、学究的な学習を展開
 - ・「プラクティカルコース」では、コンピュータや福祉などの、実践的な学習を展開

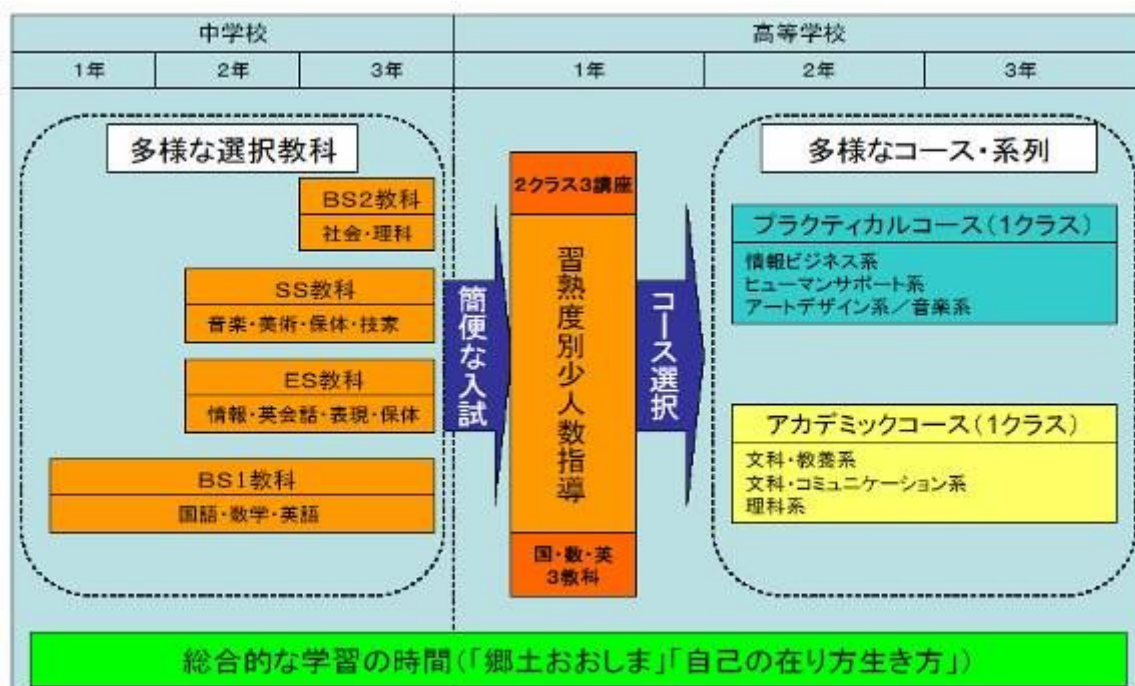


図2 中高6年間を見通した特色ある教育課程

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の多様な進路希望に対応でき、6年間継続した学習を行うことができる。 ○ 具体的に進路をしばり、夢の実現にむけて目標を設定できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2コース6系列の多様な教科・科目を効率よく運用するための工夫・検討が必要である。

(ウ) 今後の展望

高等学校における2コース6系列の設置により、中学生の多様な興味・関心に対応できるというメリットがある。しかし、同時に、実際の運用面で慎重に検討する必要がある。今年度は全学年の生徒が新教育課程による授業を受講しており、授業運用面での課題を精査し、生徒の進路状況や社会情勢を十分に把握して、必要があればコース内容や選択授業の再検討を行うなど、効率的な運用をめざすことが求められている。また、多彩な選択授業を開講する上で、各授業を担当する教員の数が最大の検討課題となってくる。生徒一人ひとりの興味・関心に即した授業の開講が実現できるよう、教員定数を維持するなど、様々な教育環境を整える必要があると思われる。

イ 中高教員による指導方法の工夫・改善

(ア) 取組み

- 交流授業における中高教員のチーム・ティーチング（T・T）を中心とした、きめ細かな指導の展開
- 中学校の選択授業における交流授業で、高校教員による単独指導の試み

(イ) アンケート実施とその結果

今年度末に連携中学生と高校1年生を対象に交流授業に関するアンケートを実施した。

a 中学校における交流授業について

Q1) 国語・数学・英語・音楽の交流授業について、どう思いますか。

	大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		人数 合計	受けていない		総回 答数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		人数	%	
国語	4	22%	11	61%	3	17%	0	0%	18	51	72%	71
数学	19	33%	24	42%	13	23%	1	2%	57	14	19%	75
英語	20	33%	36	59%	3	5%	2	3%	61	0	0%	63
音楽	19	28%	35	51%	8	12%	7	10%	69	0	0%	71

Q2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業の前にいろいろな話(雑学)を教 えてもらったのがよかった。 ○ 2人いるので質問しやすかった。 ○ 高校の授業内容がわかった。 ○ 中学校の授業で習わないことを教 えてくれた。 ○ わからないことを詳しく教えてくれ た。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ もっと高校の先生の話を書きたか った。 ○ 「高校の先生が来てくれるから～が できる」というのが欲しかった。 ○ 習っていないところがあった。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2人の先生で行う方が能率がいい。 ○ 高校でどのようなことが必要か分か る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 説明が少し難しかった。 ○ 教えるペースが速い。 ○ もっと高校のことをいろいろ話し て欲しかった。 ○ 主に中学校の先生が授業をしてい るが、高校の先生にもっと教えて欲し かった。 ○ あまり教えてもらっていない。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本当のしゃべり方が分かる。 ○ ゲーム感覚で授業ができて楽しい。 ○ 一つ上の英語を聞ける。 ○ とても分かりやすかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通訳がないと分からない。 ○ 英語だけど聞き取れないことがあ る。
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ○ パート別練習をするとき2人いて良 かった。 ○ 細かいところに気付いて注意してく れた。 ○ 音楽が少しだけ上手くなった。 ○ 歌うのが楽しくなるし、歌う意欲がわ く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ パート別練習の時に、男の先生だか ら教えてもらっていない。

b 安下庄中学校での交流授業における単独指導について

Q 1) 今年度、選択授業で高校の教員が単独指導をしたが、選択授業と普通の授業のどちらに来てもらいたかったか。(中学3年生全員に対する質問)

		選択授業	通常授業	無回答	合計
数学	人数	15	12	1	28
	%	54%	43%	4%	
英語	人数	14	10	1	25
	%	56%	40%	4%	

Q 2) 単独指導の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先生に質問しやすい。 ○ 自分にあった方を選べる。 ○ 少人数で集中しやすい。 ○ 先生が一人ひとりにしっかり教えてくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 普通の授業でも高校の先生に来てほしい。 ○ 選択受講者しか高校の先生に見てもらえない。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人数が少ない方がやりやすい。 ○ 自分にあったものが選べる。 ○ 少人数で集中しやすい。 ○ 先生が多いといろいろ聞ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 選択していない人は高校の先生の授業を受けられない。 ○ ALTにも来てもらいたい。

Q 3) 選択英語・数学を習熟度別(基礎と発展)に分け、発展を高校の教員が教えたことについて、良かったか。(選択授業を受けた生徒が回答)

		とても良い	良い	あまり良くない	良くない	合計
数学	人数	16	4	0	1	21
	%	76%	19%	0%	5%	
英語	人数	11	3	2	1	17
	%	65%	18%	12%	6%	

Q 4) 習熟度別による授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個人差に対応していた。 ○ 少人数でよかった。 ○ 自分のペースにあっていた。 ○ 勉強しやすかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ できるようになったら基礎から発展へ上げてほしい。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 分けることにより一人ひとりのレベルに合わせてできる。 ○ 自分のペースでできる。 ○ 少人数でよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ あまり分からなかった。 ○ 生徒全員を均等に教えてほしかった。

○ 高等学校における交流授業について

Q 1) 数学・英語の交流授業について、どう思いますか。

	大変役に立つ		役に立つ		あまり役に立たない		役に立たない		人数 合計	受けていない		総回 答数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		人数	%	
国語	4	22%	11	61%	3	17%	0	0%	18	51	72%	71
数学	19	33%	24	42%	13	23%	1	2%	57	14	19%	75
英語	20	33%	36	59%	3	5%	2	3%	61	0	0%	63
音楽	19	28%	35	51%	8	12%	7	10%	69	0	0%	71

Q 2) 交流授業の良い点・悪い点を書いて下さい。

	良い点	悪い点
数学 I	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校の復習ができる。 ○ 2人いるので分からないところをすぐ聞ける。 ○ 間違っているところを途中で指摘してくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校の先生と中学校の先生の教え方が違うので戸惑うこともあった。 ○ 分からないことがあっても聞きにくい。(連携中以外の生徒) ○ 主に高校の先生が授業をしているが、中学校の先生に、もっと教えてほしかった。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 分かるまで教えてくれる。 ○ 質問しやすい。 ○ 分からないときすぐ来てくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ いつもとやり方が違うので戸惑うこともあった。

中学生に対するアンケートでは、連携中学生は交流授業を概ね好意的に受け止めているようである。

また、今年度安下庄中学校の選択授業で行った高校教員による単独指導に関しては、選択授業を受けた生徒の大半が単独指導の試みに満足している結果が見られる(b-Q2)。しかし、一方で、3年生全体を対象にした、選択授業と通常授業のどちらの授業にも参加してもらいたいのかという質問に対しては、数学・英語ともにどちらの授業に参加してもらいたかったのか、大差がつかなかった。これは、単独指導による学習効果は大いに期待できると生徒も認めていると思われる一方で、選択授業の中で習熟度別授業を行ったことで高校教員の授業を受けられない生徒が多くなったため、4割以上の生徒が通常授業での交流授業の実施を望む結果となっている。この両者の希望を実現するためにも、通常授業での交流授業をベースとし、学習項目や学習団体の特性に合わせて適宜、習熟度による単独指導を行うように立案することも考えていかなければならないと思われる。

高校における交流授業では、数学と英語とで結果が分かれた。これは、数学における交流授業は習熟度に分けた3つのクラスのすべてで中学校教員とのT・T指導を実施しており、中学校教員と一緒に授業が定着しているために、生徒と教員との信頼関係も構築され、学習に集中できる環境が整っていると考えられる。一方、英語では習熟度別授業の1つのクラスにのみ中学校教員が加わり、さらに1・2学期で中学校教員が交代して指導を行ったために、クラスの雰囲気定着しないままに教員が交代することになってしまった。実際に交流授業に参加した中学校教員からも、「生徒の顔を覚えた頃に終わってしまった。」という意見が聞かれた。中学校における各教科の教員は1名しかおらず、英語科では年間を通じて交流授業を行うことが難しい状況に

あったため、十分な環境整備が整わない中で交流授業を行い、そのために生徒が交流授業の効果を感じられず、好意的に受け止められなかったものと推測される。この課題を解消するために、各中学校における教員の授業時数や分掌などの負担等、様々な条件を考え合わせ、中高の英語科教員による協議を進めて、生徒に交流授業のメリットを実感できる授業を展開できるよう検討していかなければならない。

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 指導方法の工夫・改善につながるような中高教員間の情報交換が積極的になった。 ○ 交流授業では、複数の異なる立場から指導・支援を受けることによって、一人ひとりにきめ細かな指導を行うことができ、生徒の学習意欲が高まった。 ○ 中学生に対して、高校での授業を意識した、より発展的な授業を展開できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T・Tの指導法に関する研修等を行い、指導における中高教員の役割分担（T1、T2）についての協議を積極的に行う必要がある。 ○ 選択授業での交流授業と、通常の交流授業とのバランスをいかに取っていくのかについての協議が必要である。 ○ 評価についての検討も必要である。

(エ) 今後の展望

交流授業の前後の打ち合わせや事後の反省会を確保して積極的な意見交換を行い、T・Tの充実を図る必要がある。また、今後は交流授業を実施している教科を中心にT・T指導法の研修を行い、生徒の学力向上の一助となるよう一層努力していかなければならない。

高校教員による単独指導の実施は、生徒も教員も概ね好評であった。今後も、従来のT・Tの形式だけではなく、単独指導も指導形態の一つと位置づけて前向きに検討していくことが教員の指導方法の改善にもつながってくると思われる。

ウ 基礎学力の定着度の確認方法および指導へのフィードバック

(ア) 取組み

- T・Tによるつまづき箇所の発見
- 「教科別診断表」や「単元別テスト」を活用した定着度の確認と指導へのフィードバック
- 定期テストの共通化によるデータを活用した資料の作成とフィードバック方法の検討

高等学校では、平成14年度の入学者選抜から、連携中学校からの入学者の決定は、学力検査や調査書を用いず、面接や小論文等による、いわゆる『簡便な入試』となった。この地域に連携型中高一貫教育を導入しても、中・高等学校生の学力をきちんと保証し、地域や保護者にも不安を与えないという意味からも少なくとも学力検査の行われていた5教科については、中高が連携した一人ひとりの学力の定着度の把握が必要とされ、その方法についての研究を行ってきた。さらに、それらを一人ひとりの学力のより一層の向上をめざすためには、それらを生徒個人の成績の把握にとどまらず、広く指導方法の工夫・改善等にフィードバックしていくことが必要とされる。

学習内容の定着度の確認とそのフィードバックは、その間隔が短いほど効果的であると考えられる。しかし、その場で授業で教えたことの定着度を確認し、その場で理解不十分な生徒に指導を加えることは実際問題として難しい。しかし、ティーム・ティーチングであれば、一人の教員が授業を進行している間に一方の教員が机間指導等を行って生徒のつまづきを早期に発見し、指導できる可能性がある。

中学校では、国語・社会・数学・理科・英語の5教科について、単元終了ごとに「単元別テスト」を実施し、基礎的・基本的事項にしぼって、より短いスパンでの定着度の把握を行い、指導へのフィードバックを迅速化することによって生徒の基礎学力の向上に努めている。上記5教科の「定期テスト」も定着度の確認に活用している。中学校では、連携校の定期テスト問題の8割程度を共通化し、定着度の確認をするための成績資料作成を中1から高1まで一貫して行うことにした。定期テストの分析を行うために、中高で協力して「教科別診断表」という成績資料を作成している。(表2参照)

中学校 第〇学年 〇〇科教科別診断表

〇〇中学校

配点		得点						正答率							
		20	20	20	20			80	大問1	大問2	大問3	大問4	大問5	大問6	総合
目標ボーダー		10	10	8	8			36							
生徒番号	標準得点	大問1	大問2	大問3	大問4	大問5	大問6	総合	単元名	技能	知識・理解				
									観	点	等				
a990301	59	20	14	16	14			64	○	△	◇	□			80
a990302	49	10	8	14	8			40	○	△	◇	□			50
a990303	52	13	14	13	12			52	○	△	◇	□			65
a990304	65	20	17	19	13			69	○	△	◇	□			86
a990305	53	12	14	18	9			53	○	△	◇	□			66
a990306	64	20	15	18	14			67	○	△	◇	□			84
a990307	45	7	6	10	8			31	○	△	◇	□			39
a990308	48	14	10	7	6			37	○	△	◇	□			46
a990309	56	16	18	14	14			62	○	△	◇	□			78
a990310	57	19	14	13	17			63	○	△	◇	□			79
a990311	53	12	15	14	12			53	○	△	◇	□			66
a990312	58	18	16	18	11			63	○	△	◇	□			79
a990313	65	19	18	16	18			71	○	△	◇	□			89
a990314	63	17	17	15	19			68	○	△	◇	□			85
a990315	68	19	18	18	20			75	○	△	◇	□			94
学校	合計点	236	214	223	195			868							
	人数	15	15	15	15			15							15
	平均点(通過率)	15.7	14.3	14.9	13			57.9							72
	ボーダー未達人数	1	2	1	1			1							
	最高点(率)	20	18	19	20			75							94
最低点(率)	7	6	7	6			31							39	
連携校	合計点	1056	807	831	585			3279							
	人数	50	50	50	50			50							50
	平均点(通過率)	16.2	13.2	16.6	11.7			65.6							66
	ボーダー未達人数	3	5	4	2			3							
	最高点(率)	20	20	20	20			100							100
最低点(率)	5	5	5	4			25							25	

表2 教科別診断表

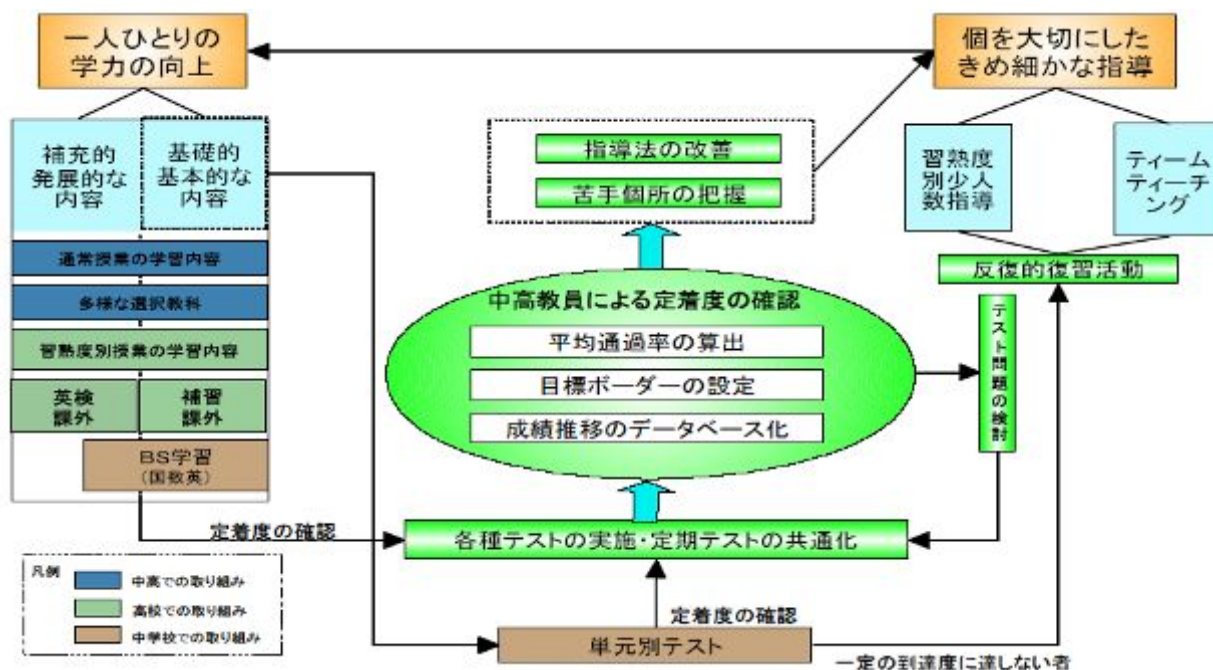


図3 定着度の確認と指導へのフィードバック体制

さらに長いスパンでの学力の定着度を確認するために中高で「基礎力診断テスト」を実施している。以上のような各種テストを用いた学力の定着度の確認方法とそのフィードバック体制を図示したのが下図である（図3参照）。図中の左側の日常の取組み、図中の中央は基礎学力の定着度の確認、図中の右側は指導法を中心とした生徒への投げかけである。全体として、日常の取組みによって生徒についての学力の定着度を各種テストによって確認し、それを、指導法を中心とした生徒への投げかけに対するフィードバック、あるいは取組みの有効性をはかる「ものさし」としてフィードバックするという一連の流れを示している。

また、定期テスト後のデータ送付から「教科別診断表」作成までにかかりの日数を要するため、考査時に生徒がつまづいている箇所を直後の指導に生かし、さらに本地域の中学生の指導重点箇所を探り出す手段が必要となっていた。すべてが数字のデータである「教科別診断表」をより効果的に活用し、日頃の授業の指導力向上に資するために、本年度は担当教員の採点上の気づきをまとめた「定期テストの感想・気づき」という一覧表を「教科別診断表」と同時期に作成し、生徒のつまづき箇所を発見しやすくするとともに、生徒の不得意分野の解明と日頃の指導との関連性を教員が自己評価できる機会にもなっている。

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ T・Tの実施により、その場で理解が不十分な生徒に即座に対応できる。 ○ 教員の指導力向上および日々の授業の改善に有効であり、生徒の学力向上の基盤となっている。 ○ 中高の教員間で、学力の問題について具体的な資料に基づいた話し合いができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ フィードバックの効果的な方法について、さらに研修を深める必要がある。 ○ 基礎学力が他地域と比べてどのような傾向にあるのかを検討する必要がある。 ○ 高等学校における、データの有効的な活用方法の検討が必要である。

○ 各授業、各単元、各学期ごとの様々なスパンで生徒の学力の定着度を確認することができ、適宜必要な指導を行うことができる。	
--	--

(ウ) 今後の展望

現在、中・高の5教科（国語・社会・数学・理科・英語）の担当教員を中心にデータの入力や分析を行っており、データの蓄積を行い、日々の指導の改善にフィードバックできるシステムを作り上げている。これにより、個人の成績の推移を取り出して活用することができ、生徒にとっても教員にとっても、学習を進める上での指針になる。また本年度作成した「定期テストの感想・気付き」を補完的に用いることで、データ分析をより意味のある生きたデータとすることが考えられる。引き続き、データの活用の取組みと一層の工夫・改善が課題である。

また、指導へのフィードバック体制をより強固なものにするために、本地域の中高一貫教育で生徒に身につけさせたい「基礎学力」とは何かについて、中高教員間での検討を重ね、各教科でより具体的な目標や評価規準を設定して共通理解を深めることが必要となってくる。以下の項目に挙げている「安下庄高校が求める5教科の力」との関連性も探りながら、協議していく必要がある。

エ 「安下庄高校が求める5教科の力」の改善

(ア) 取組み

○ 中高教員による「安下庄高校が求める5教科の力」（通称：ガイドライン）の改訂および活用方法の工夫・改善
--

高等学校では、平成14年度の入学者選抜から、連携中学校からの入学者の決定は、学力検査や調査書を用いず、面接や小論文等による、いわゆる『簡便な入試』となった。これを受けて昨年度は大島郡内の全ての中学生や保護者を対象にしたアンケートを実施し、連携型中高一貫教育に対する様々な視点が明らかにされた。その中でも、生徒の学力に関する保護者の意見を参考にし、昨年度は中高の教員で協議を重ね、「安下庄高校が求める5教科の力」を完成させた。（資料Ⅱ参照）

中学校卒業時に身に付けて欲しい学習内容を教科ごとに整理し、教科あるいは様々な場で検討や協議を重ね、中学生に解りやすい文章表現を連携3中学校にお願いして作成した。昨年度は連携3中学校の3年生に配布し、生徒自身が読み進め自らが自己評価することにした。今年度は、中学3年生だけではなく2年生にも2学期終了前に配布をし、より早い段階から進路に対する意識を高めることも期待されている。

さらに、今年度は安下庄中学校における選択授業（BS）の交流授業で、高校教員が単独指導を行い、ガイドラインに掲載されている項目をもとにプリントを作成して授業を行った。

(イ) 改訂の内容

		改訂内容
数 学	改訂前	<input type="checkbox"/> 一次方程式・連立方程式・二次方程式を解くことができる。 <input type="checkbox"/> 関数のとる値の変化の割合を求めることができる。
	改訂後	<input type="checkbox"/> 一次方程式・連立方程式・二次方程式を解くことができる。 1・2・3年 <input type="checkbox"/> 関数のとる値の変化の割合を求めることができる。 2・3年
理 科	改訂前	<input type="checkbox"/> 化学の基本的な原理・法則を知る。
	改訂後	<input type="checkbox"/> 化学の基本的な原理・法則を知る。 (1) 2種類以上の物質が結びついて性質の違う別の物質ができる化学変化を何といいますか。() (2) 物質どうしが結びつくとき、質量の比は()である。 (3) 物質が2種類以上の物質に分かれる化学変化を何といいますか。() (4) (1)で答えた化学変化のうち、物質が酸素と結びつく変化を特に何とよんでいますか。() (5) (2)で答えた化学変化のうち、物質が酸素を失う変化を特に何とよんでいますか。() (6) いっぽんに、化学変化の前後で、その変化に関係している物質全体の質量は変わらない。これを何の法則といいますか。()
英 語	改訂前	<input type="checkbox"/> 受動態の文を理解し、簡単な受動態の文を書いたり、話したり出できる。 (be 動詞+過去分詞形: They are loved by everybody. など)
	改訂後	<input type="checkbox"/> 受け身 (～される) be 動詞 (is, am, are) + 動詞の過去分詞形 This book is written in English. This book isn't written in English. Is this book written in English? Yes, it is. / No, it isn't. ※ 過去分詞形は過去形と同じく ed をつければよいが、そうでないものもあるので覚える必要がある。 ※ 受け身文を過去にする場合は、be 動詞を過去形にする。 (例) This book was written ten years ago. ※ be 動詞を除いて、動詞の ed 形を用いて、後ろから名詞を修飾する形がある。 The book is written in English. (その本は英語で書かれている。) A book written in English (英語で書かれた本) This is a book written in English. (これは英語で書かれた本です。)

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中高教員間で基礎基本となる学力についての議論が活発に行われた。○ 中学校と高校での指導の連続性や一貫性に対する意識が向上した。	<ul style="list-style-type: none">○ ガイドラインで示された学習項目を今後どのような形で評価し、指導に生かして行くのかが大きな課題である。○ 中学生の自己評価が思うように進まず、中学校教員の指導が必要な部分がある。

(エ) 今後の展望

ガイドラインを作成して今年度で2年目であり、今後の運用面については中高教員が十分に協議していかなければならない。特に高校入学段階で、連携中学生がどの程度ガイドラインを活用し、どの程度記載された内容を理解できているのか、といった評価に関する問題も十分に協議していかなければならない。

さらに、中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導での活用や、中学校・高校での授業における活用方法や、指導へのフィードバック方法など、課題は山積している。今年度の実施状況を十分に踏まえ、中学生にとってより効果的で活用しやすいガイドラインを目指して改良を加えていきたい。

オ 6年間を見通した計画的な資格取得

(ア) 取組み

- より専門的な資格取得のサポートの実施
 - ・ 商業科 … 「情報処理検定」、「ワープロ実務検定」、「簿記実務検定」、「珠算・電卓実務検定」、「商業経済検定」(全て財団法人全国商業高等学校協会主催)
 - ・ 家庭科 … 「全国高等学校家庭科食物調理技術検定」、「全国高等学校家庭科被服製作技術検定」、「全国高等学校家庭科保育検定」、「訪問介護員・障害者(児)ホームヘルパー3級」

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 目標を立てることにより、積極的に授業に取り組むことができる。○ 目標が明確になるので、主体的に学ぶ姿勢を育むことができる。○ 上位資格へのステップアップを果たすことで、生徒に達成感・充実感を味わわせることができ、より積極的に授業に取り組むことができる。○ 訪問介護員の資格については、実習における外部とのかかわりが多いため、公共心や職業に対する意識の高さがみられる	<ul style="list-style-type: none">○ 連携3中学校の生徒数が減少し、男女共修や他学年合同の授業がふえてきているため、指導計画、評価の共通化を工夫しなければならない。○ 合格することのみが学習の目標になる恐れがある。○ 自主的・積極的に検定を受験する生徒の減少。○ 検定の合格を目標とした授業にならないよう、授業研究に努めなければならない。○ 家庭科を履修していない生徒の受験要望が増えてきたことへの対応を考えていかなければならない。

(ウ) 今後の展望

検定は、生徒に達成感・充実感を味わわせることができるため、さらなる学習への励みとなるものである。また、結果は生徒の学力をはかるのみでなく、教員の授業の成果を客観的にはかる材料となるので、授業研究の糧にもなる。よって、教育効果は大きいと言える。

しかし、生徒の習熟度をしっかり把握せずに目標を設定すると、消化不良の生徒を増加させることになる。今後も、生徒の習熟度を見極め、教科指導と検定対策とのバランスを十分に考慮し、日々の授業研究に努めるとともに、検定受験の意義を生徒に理解させるための取り組みがより一層必要になると考えられる。

カ 中学校修了後の「ゆとり」を生かした指導の取組み

中高一貫教育によって生じる「ゆとり」については、様々な視点に立った捉え方があるように思うが、本地域では、連携中学生の中学修了後から高校入学後の学習にスムーズに移行できるよう、効果的な「ゆとり」の活用方法について研究を行った。

(ア) 取組み

中学校修了後に週一回、連携3中学生に対して、数学科と英語科の教員による指導を安下庄高等学校で行い、生徒への指導及び生徒の学習のサポートを継続して行った。

a 数学科の取組み

数学科では、基本的な計算能力および作図の能力の向上を目指した。一方はやや複雑な四則演算をこなす力であり、他方は解答の道すじをとらえる力となるものである。

毎回の指導を「前回の課題のテスト」と「次回の課題の要点説明」の2部で構成し、課題で不明な点は、中学校の先生に質問するなどして、完成して提出させることとした。

b 英語科の取組み

昨年度、基本的な単語の学習から初歩的な文法事項まで指導内容をいくつかのステップに分け、中学生が各段階のチャレンジテストを受けて合格すれば次のステップの学習が行えるよう、個人の到達度・理解度に応じた指導を行い、今年度も引き

続き行うことにしている。また、必要に応じて、グループ内での一斉指導形式で補足説明を行い、中学生が積極的に参加できるよう工夫して指導を行うことにしている。

さらに、高等学校で指導を行うため、高等学校の英語科教員全員が指導に参加している。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生の苦手とする分野の確認ができ、高等学校で補充すべき項目が明確になった。 ○ 学習習慣を確立する一助となることが期待される。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一層の計画的な指導が必要である。 ○ 各チャレンジテストで取り上げる学習項目について、検討が必要である。 ○ 本年度作成したガイドラインの活用方法を検討していく必要がある。

(ウ) 今後の展望

今後は更に指導形態や指導内容に工夫を加え、連携中学生にとって高校生活への円滑な橋渡しができるよう、計画的に指導を計画・実践できるよう検討していく。

また、ガイドラインをいかに指導の中で活用し、中学校時の学習内容を中学生に徹底させていくか、中高教員による協議が必要であると思われる。

(2) 「6年間を見通したテーマ学習」の取組み

～ 「郷土おおしま」の取組み ～

ア ねらい

「郷土おおしま」を「6年間を見通したテーマ」とし、総合的な学習の時間に取り組んでいる。その主なねらいは次のような能力や態度の育成にある。

- 自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的な判断によってよりよく問題を解決しようとする資質や能力の育成
- 学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度の育成
- 地域社会と関わりながら、郷土についての理解を深め、郷土の歴史や文化の継承と郷土を愛する心の育成

イ 中学校における取組み

各中学校によって、具体的な取り組み方については、様々であり、学校の規模、生徒の様子、環境に合わせた形で行っている。以下は本年度の東和中学校の取組みについてである。

(ア) 研究の形態について

本年度の「郷土おおしま」では、1学期は全校生徒を異年齢集団で編成し、「おおしまの暮らしとふれあい」のテーマについて、「福祉とボランティア」に焦点をあてて体験学習をした。

2学期以降は学年単位で学習を行い、学級担任を中心に実施している。本年度よ

り、テーマの研究も1年生は学年全体で、2年生はグループで、3年生は個人で取り組むこととし、学年に応じて形態を考慮した。

(イ) 全校での取組み

a 福祉とボランティア1日体験学習

高齢化や少子化が進む大島についての理解を深め、他者のために主体的に行動する態度の育成と他者を尊重する気持ちを育むことをねらいとして、前述のように1学期に1日体験学習を実施した。

- 老人福祉施設での介護体験
- 保育園児との交流
- 老人クラブとの交流

b 講演会の実施

在り方生き方、郷土おおしまについて、それぞれ講演会を実施した。特に、周防大島町文化交流センター学芸員、木村哲也氏の講演では、宮本常一が残した膨大な写真を紹介していただいた。キーワードを「あるく みる きく」とし、他人の実践例をなぞるのではなく、自分の興味や課題を研究・発展させていく、「実際に行ってみる・見てみる・聞いてみる」という宮本常一の生き方や考え方とともに、総合的な学習の研究方法も教えていただいた。

(ウ) 各学年の取組み

○ 1 学年

学級全体で「環境」について取り組み、その中で類似のテーマ毎に班で研究した。

○ 2 年生

「暮らしとふれあい」で産業について学習し、班で職業について調べ、職場体験学習への足がかりとした。

○ 3 年生

「郷土の興味・関心のある内容」について個人で研究した。

ウ 高等学校における取組み

(ア) 資料館めぐり

1年生を対象として大島郡についての理解をより深めるために、郷土にかかわりある資料館を訪問して学習した。

Aコース（旧東和町方面）… 陸奥記念館、周防大島文化交流センター

Bコース（旧久賀町方面）… 屋代ダム、旧久賀町歴史民俗資料館

(イ) 特別講義の実施

周防大島町の中で、様々な分野で活躍されている方を講師に招き、専門分野の紹介や周防大島町の魅力などについての特別講義を1・2年生対象に実施した。また、今年度は、周防大島文化交流センター学芸員の木村哲也氏に講義をお願いし、「フィールドワークの進め方」と題して、宮本常一の行ってきた研究手法から参考となる取組みや心構えなどについて理解を深めることができた。

(ウ) 職場見学の実施

研究テーマをより身近なものとして捉え、郷土に対する理解をより一層深めることを目的として、1・2年生全員が周防大島町の27の事業所や施設を訪問して、職場見学を実施した。これは、郷土おおしまを研究していく上で一番の課題に挙げられてきたテーマの決定をより効果的に行うことがねらいであった。また、身近な人々が仕事に取り組む様子を見学させてもらうことで、将来の進路について見つけ

直す機会となることも期待される。

(エ) 郷土大学（講演会）への参加（希望者）

郷土の歴史や文化について理解を深めるために定期的に地域で開かれている講演会（郷土大学）へ希望する生徒を募り、講演の後、講師の先生より地域調査や聞き書きの方法についてアドバイスをいただくようにしている。

(オ) グループ学習

各自テーマを設定し、ある程度夏季休業中に調査が進んだ段階で、2学期に1, 2年の学年の枠をはずして、テーマごとに大きく次の4つのグループに分けて学習する機会を設定した。

- Aグループ ハワイ関係（2年生のみ対象）
- Bグループ 福祉・医療
- Cグループ 歴史・文化
- Dグループ 産業・環境・自然

エ 評価について

(ア) 評価の観点

中学校	1 学年	○主体的に課題を発見する力 ○ふるさと「おおしま」を大切にすることの態度 ○情報の集め方・調べ方
	2 学年	○主体的・創造的な態度 ○多角的・総合的な考察力 ○人・地域社会との関係力
	3 学年	○主体的・実践的な態度 ○課題を解決する力 ○自己の在り方生き方を追求する力
高等学校	1 学年	○地元で働く人々生き方を参考にして、各自の興味・関心に応じたテーマを設定し、調査・研究を中心に進めて成果をまとめることができたか。
	2 学年	○調査・研究を進めてパソコンでレポートを作成し、考察に加えて自分なりの「提言」も考えて発表することができたか。
	3 学年	○自己の在り方生き方を見つめ直し、進路研究を深めることができたか。

(イ) 生徒の自己評価

毎時間の学習を記録した用紙をポートフォリオ形式で各自綴じていき、課題意識を持たせている。3年間の総合的な学習の時間の内容を1冊のファイルに記録することで、中学校での学習の積み重ねを意識できるように配慮した。また、学年の発表では、生徒同士による相互評価も取り入れた。

(ウ) 教員による評価

毎時間の学習の記録用紙、レポート、発表会の内容を中心に評価する。

(エ) 体験学習受入先による評価

東和中学校での福祉とボランティア1日体験では、受入先にも生徒の態度・意欲・体験学習への意見改善点について評価していただき、生徒・教員ともに反省材料としている。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 身近な題材の中に課題を見つけ、自ら主体的に学ぼうとする姿が見られるようになった。 ○ 調査の結果から現状における問題点について、自分なりの考察を加えることができた。 ○ 郷土への関心が深まり、地域に目が向くようになった。 ○ 全員が人前で自分の研究成果を発表する機会を得た。 ○ インターネットや本からの情報のみならず、現地調査を行ったり、地域の方にアンケートを取ったり、調査内容を写真に収めたりするなど、創意工夫を凝らした研究が見られるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校時のテーマ学習を高校でどのように発展させるかについての検討が必要である。 ○ 「郷土おおしま」という大きな枠があることによって、生徒の興味が限定されてしまいがちである。「郷土おおしま」を基に、発展した課題を見つける必要がある。 ○ 限られた時間の中で研究・考察する力を身に付け、先を見通す力を育成する必要がある。 ○ 生徒を十分に支援できるだけの教員の力量を高めていく必要がある。 ○ インターネットや文献による調査研究のみで終わらないよう、地域のネットワークをうまく活用する工夫が必要である。

カ 今後の展望

本来、総合的な学習の時間は様々な学習活動との連携を図り、弾力的な指導をもって進めていくべきである。そのためにはまず、指導する側の協力体制と幅広い視野に基づいた様々な視点からの働きかけが求められる。現行の教育課程においてどこまで時間を確保できるか、また教科間の協力体制をどのように図っていくかが問題となる。

また、今後さらに「郷土おおしま」の時間を充実させるためには、様々なふるさと大島のことを学ぶ中で、自分自身の興味・関心や疑問、驚きなどを土台にして、どのようにして「自分の生き方の自覚」に結びつくような課題の設定や活動を仕組んでいくかが最も大切な部分だと思われる。内面からの興味・関心に基づいて、調査研究を進め学習を深めていく方法を模索していく必要がある。

さらに、宮本常一が用いた研究手法であるフィールドワークに対する理解は、講演会や文化交流センターの活用などにより徐々に深まっているように思われる。今後は、どのようにしてフィールドワークの進め方をより一層定着させるのか、また、どのようにして生徒の調査研究に深みを持たせていくのかについて、中高間での指導の連続性も視野に入れて教員で協議を重ねていきたい。

(3) 「体験的な学習を重視した学校行事」の取組み

ア ボランティア活動

一昨年度までは「ふれあいクリーン作戦」という名称で、4校が同一日に3地区に別れて中高合同で海岸清掃を実施していたが、昨年度からは「ボランティア活動」に変更し、それぞれの地域において、学校・部活動または個人単位で行えるボランティア活動を積極的に奨励し参加している。「ボランティア活動」への名称変更に伴い、実施形態も変更されたため、この活動のねらいも見直すべきだという声上がり、本

年度新たに、以下のようなねらいとした。

(ア) ねらい

- 中学校
身近なボランティア活動を通して、地域社会の一員として支え合い協力していこうとする思いやりの心を育て、学校の級友や地域の人々に主体的に関わろうとする態度を養う。
- 高等学校
身近なボランティア活動に主体的に参加することで、幅広い年齢層の人との関わりを持ち、豊かな人間関係の醸成を図るとともに、集団の一員としての自覚と責任感を育成し、郷土を愛する心を育てる。

(イ) 各校の取組み

学 校	主 な 内 容
安下庄中学校	○ 町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○ 学校周辺のゴミ拾い
日良居中学校	○ 学校近郊の海岸清掃活動 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ 県立養護学校の児童生徒のプール活動の介助
東 和中学校	○ 大島郡陸上競技大会での補助員 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ サザンセトロードレースの補助員
安下庄高等学校	○ 町主催の花火大会後のゴミの分別作業 ○ 日本テレビ主催のチャリティー募金活動 ○ 日良居中学校秋季大運動会での運営補助 ○ 各種福祉施設・病院などでのボランティア ○ サザンセトロードレースの補助員 他多数

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校間のボランティア活動に関する情報交換が頻繁に行えるようになった。 ○ 各校で実施したボランティア活動の情報を集約し、次年度に向けての参考にすることが出来る。 ○ 部活動などの小さな単位で活動が実施でき、迅速に対応することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生・高校生が共同で作業する場が持てるように、さらに積極的に活動の場を探っていく必要がある。 ○ 小・中・高での連携も視野に入れていく必要がある。 ○ 生徒への事前の情報提供を徹底し、自分の興味に応じた活動を幅広く選択できるように工夫すべきである。

(エ) 今後の展望

今年度新たに定めた「ねらい」によって、中学校・高校でのボランティアに対する捉え方の違いがより明確になったように思われる。今後は、一人でも多くの中学生・高校生が参加できるよう、様々なボランティア活動に取り組んでいくことが重要である。その中で、中学生と高校生が合同で行える活動をより多く模索していく必要がある。

また、中学校・高校それぞれが、ボランティア活動後に生徒に感想を書かせているが、一人の生徒が中学1年生から高校3年生までどのようなボランティアを行ってきたのかが分かるものを作成し、6年間継続して持たせてみることを検討してみてもどうか、という案が担当者会議の中で出ている。ボランティア活動を通して思いやりの精神を育てるには多くの経験と時間がかかることが予想されるため、生徒がボランティア活動に参加していく上で、中高6年間での継続的な支援体制を改めて考え直してみる必要がある。

さらに、町の社会福祉協議会とも情報交換をしながら、より地域に密着したボランティア活動を模索し、中高間のみならず、小・中・高、ひいては周防大島町全体を巻き込んだ大きなボランティア活動の流れが醸成されることを願っている。

イ イングリッシュキャンプ

(ア) ねらい

ネイティブ・スピーカーとのふれあいを通して、実践的語学力を身につけるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と、視野を広げ異文化を理解し尊重する態度の育成を図る。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の英語が通じた喜びを中学生に実感させることができた。 ○ 中学生が英語学習に熱心に取り組む契機となっている。 ○ ALTと生活したり、ALTの出身地について地図や写真や紙幣等を使って説明してもらったりして、異文化理解にも役立っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現在の活動で更に見直しや改善を進め、できる限り多くの中学生や中学校の英語科教員、さらにALTに、楽しんで参加してもらえる活動にしていく必要がある。 ○ より多くの連携中学校の生徒に参加してもらうため、活動をよりよく知ってもらう努力が必要である。 ○ 事前・事後を含めて、参加教員のより綿密な協議が必要である。

(ウ) 今後の展望

毎年、新たなALTも加わり、生徒のみならず教員にとっても得るものが多いセミナーとなっている。今年度で9回目を迎え、同じ活動も少しずつ工夫を凝らして改善されており、今後更に中学校教員の意見も参考にしながら、中学生が毎年参加しても飽きる事のないキャンプを目指していく必要がある。今後は、自己について語る、自国の文化について意見を述べる等、より発展的な活動を導入していきたい。また、キャンプ終了後にも、手紙のやりとりなど、英語への学習意欲を持続させるような活動を取り入れていくことを考えている。中高の英語科教員での役割分担については、今後も可能な限り明確化していく必要がある。

ウ ふれあいマラソン大会

(ア) ねらい

マラソンを通して、心身の健全な発達や健康の保持増進を図り、自己管理に努める。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学生は高校生を目標にし、高校生は中学生に負けれないという気持ちで走り、また連携中学校生同士も負けれないという気持ちで走ることで、生徒のやる気呼び起こす。 ○ 地域の人達が沿道から声援を送り、生徒は地域とのつながりを実感できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大会当日の沿道での交通整理など、教職員・保護者・地域の人達で協力して、生徒の安全確保に努める必要がある。 ○ 大会の運営全般について、中高教員で十分に検討していく必要がある。

(ウ) 今後の展望

第6回ふれあいマラソン大会は、連携4校の教職員や保護者、地域の方々の御協力により、無事終えることができた。この行事も6回目を迎え、定着してきたように思える。

連携中学校出身の高校生は、中学校3年間の記録が蓄積され、過去の記録を参考にした目標の設定をスムーズに行うことができた。連携中学校以外の生徒も、その姿を自然とまねる様子が見られた。

時期が近づくにつれて、保護者や地域の方々からは、安下庄地区を爽やかに駆け抜ける生徒たちの姿を待ちわびる声が多く聞こえてきた。

小規模校の連携4校をはじめ、少子・高齢化が進む橘・東和地域において、このマラソン大会の実施はたいへん意義が大きく、今後、さらに中高一貫教育を地域にPRしていく必要がある。



安下庄地区を疾走する中高生

エ ふれあいみかん収穫作業

(ア) ねらい

- 中学生と高校生の交流を促進する
- 地域の産業を理解し、勤労の貴さを体得し、職業観を確立する

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校生と中学生が協力して作業に当たることにより、中高間でのふれあいがしっかりできた。 ○ 作業をした各農家から、概ね良い評価を頂き、中高一貫校として地域社会への貢献と言う面で良いアピールとなった。 ○ 農家募集や連絡などの業務は各中学と分担して行ったため、連絡調整などもスムーズに行うことができ、円滑に準備を進められた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 年によってみかんのできや収穫時期に差が生じるため人数分の農家の確保が困難なことがある。 ○ 担当が変わってもスムーズに準備が進むようにマニュアル化をすすめる必要がある。

今年度の収穫作業を終えた生徒の感想をいくつか紹介しておく。

- ・最初は木が見えないほどのみがついていたみかんの木が最後にはよく見えた。よく見えたとき、「これだけやった！」という満足感がありうれしかった。高校生とも話ができてよかった。（中学女子）
- ・この地域はたくさんのみかんであふれているが、普段何気なく食べたりもらったりしているみかんも、農家の方々の苦労があるからこそ食べられるのだということを学んだし、感謝しなければならないと思った。（高校女子）
- ・中学生のときより楽しく交流しながら作業ができた。農家の方も優しく、中学生とも笑ったりしながらできたのでよかった。（高校女子）

(ウ) 今後の展望

昨年度より中高で農家募集・連絡等の業務を分担しており、準備段階においても今年度は中高間の連絡調整もしっかりとることができた。

来年度に向けて、準備方法のマニュアル化を進めるとともに、より一層の協力体制を築いていく必要がある。



みかん収穫作業で農家の苦労を実感

オ 私の主張・郷土おおしま発表大会

平成13年度から実施している「郷土おおしま発表大会」は今年で5年目を迎えた。この発表大会は、中高合同による学校行事として定着し、中学校・高校の生徒会執行部が司会進行や補助を務めて大会を運営している。

(ア) ねらい

- 「私の主張」発表大会
他学年や同学年の生徒の発表をとして、自己の在り方生き方を考え、自己をいっそう成長させようとする意欲や態度を育む。
- 「郷土おおしま」発表大会
他の連携校生徒の発表を聞くことで、取組みの様子を知るとともに、自らの研究に役立てる。

(イ) 発表内容

a 「私の主張」発表大会

演 題	学 校	内 容
お笑い芸人	安下庄中学校	最近のお笑いブームの傾向と、人を心から和ませるお笑いについての考察
「ことば」について	東和中学校	私たちが日頃使っている方言の持つ力と大切さ
絆（きずな）	日良居中学校	文化祭のクラス企画を通して築き上げられたクラスの絆の大切さ
高齢化と介護	安下庄高校1年	祖父の介護を通して感じた心のつながりと介護の大切さ
私のクラス・2年A組	安下庄高校2年	文化祭のクラス企画を通して芽生えた級友との友情と、協力することの大切さ
陸上競技と私	安下庄高校2年	陸上競技に対する思いと決意

b 「郷土おおしま」発表大会

演 題	学 校	内 容
大島の特産を使ったおかし	安下庄中学校	大島で人気のあるお菓子を調べ、また自分たちもみかんを使ったお菓子を作ってみた感想・気づき
「戦艦陸奥」について	東和中学校	戦艦陸奥の生涯と当時の日本の様子や、また、「大和ミュージアム」を訪れた感想や戦争に対する思い
自然のテーマパーク ～大島の今・これから～ 循環型社会の実現をめざして	日良居中学校	大島全体を大きなテーマパークに見立て、今後の進む道やエネルギーの循環利用についての提案
大島の食文化	安下庄高校1年	大島の各地区の住民へのアンケートや、自らの料理作りや栄養価計算を交えた、郷土料理に関する考察
東和の今と昔	安下庄高校2年	宮本常一が撮影した東和の昔の写真と現在の写真との比較および土地利用の変遷について自分の考察を交えた分析

(ウ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表大会に向けて、全員が身の回りのテーマについてあらためて考え、自分の意見をまとめたり、考察を加えたりする機会となった。 ○ 代表者の意見や発表を聞くことによって、各自が新しい視点に気づいたり、あるいは自分自身を振り返ったりする機会となり、相乗効果が今後期待できる。 ○ 中学生、高校生がそれぞれ発表することによって、発表内容のみならず、場の雰囲気、その他においてもお互いよい意味で刺激を受ける機会となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程の関係上調査研究の時間の確保がなかなか難しい中、学年進行によって研究発表内容そのものをどのように深めていけるかについて依然課題が残る。 ○ 郷土おおしま発表大会については、パワーポイントとプロジェクターを使った発表形態に偏らないように、各校で工夫・改善する必要がある。 ○ 中高一貫教育の行事でありながら、お互いの準備打ち合わせの時間がなかなか確保できず、運営についても高校の生徒会役員に役割が偏りがちである。

カ ハワイ・カウアイ島修学旅行

(ア) 取組み

○ 本校とハワイとの交流の歴史

- 1996年(平成8年) 「安高を考える会」設立
- 1997年(平成9年) ハワイ・カウアイ島事前視察
「安高を考える会」(橘町) ハワイ研修旅行の支援を決定
- 1998年(平成10年) 第1回ハワイ・カウアイ島研修旅行(ワイメア高校と交流)
- 1999年(平成11年) 第2回ハワイ・カウアイ島研修旅行(カウアイ高校と交流)

- 2000年(平成12年) 第3回ハワイ・カウアイ島研修旅行(カウアイ高校と交流)
- 2001年(平成13年) 連携型中高一貫教育校としてスタート
- 2002年(平成14年) 第4回ハワイ・カウアイ島研修旅行(カパア高校と交流)
- 2003年(平成15年) 第5回ハワイ・カウアイ島研修旅行(カウアイ高校と交流)
- 2004年(平成16年) 第6回ハワイ・カウアイ島研修旅行(ワイメア高校と交流)
- 2005年(平成17年) 第7回ハワイ・カウアイ島研修旅行(ワイメア高校と交流)

○ **本年度の交流校**

ワイメア高校(カウアイ島)

○ **今年度の日程**

10月4日(火)～10月9日(日)

1日目 (安下庄発)

出発式〔於：周防大島町総合庁舎〕
(ホノルル着後・カウアイへ)

カウアイ市長訪問

ホテルでゲストとの夕食会(ホテル泊)

2日目 ワイメア高校との交流(学校案内、日本文化紹介、歓迎式典)

カウアイ島観光(ワイメアキャニオン)

ワイメア高校における夕食会 (ホテル泊)

3日目 カウアイ観光(ワイメアキャニオン、シダの洞窟)
(ホノルルへ)

ホノルル観光(アリゾナ記念館、カメハメハ大王像、アラモアナ公園)
(ホテル泊)

4日目 ダイヤモンドヘッド登山

班別自主研修 (ホテル泊)

5日目 (ホノルル発)

6日目 (羽田経由広島着)

(バスにて安下庄へ)



カウアイ市長を訪問

○ **事前の取組み**

- ・学校設定科目「米語会話」の開講
- ・イングリッシュキャンプの実施
- ・日本ハワイ移民資料館見学
- ・ALTを交えて日本文化紹介の事前指導
- ・スピーチの指導
- ・「総合的な学習の時間」でのハワイに関するレポート作成



ワイメア高校での日本文化紹介

- ・「ホームルーム活動」でのハワイの歴史や文化についての学習

(イ) **成果と課題**

成 果	課 題
○ 外国の言語・歴史・文化・習慣等を実際に自分で見聞き、平素の学習では得ることのできない経験を通して、視野を広め国際感覚を身につける第一歩となった。	○ 英会話や異文化理解に対する意欲を、帰国後いかに持続させるかが今後も大きな課題である。 ○ 現地でお世話になった高校やスタッフと旅行の後も交流を続け、次年

<ul style="list-style-type: none"> ○ 集団行動を通して、規律を守り、協力し合う心を養うと共に集団生活の中で、教師と生徒、生徒同士の人間関係をより豊かなものにすることができた。 ○ 海外での異文化体験を通して、日本の文化を再認識することができた。 ○ 外国の文化を実体験することで、積極的に活動するようになった。 ○ 交流校の生徒との交流を通して、異文化に対する興味や英会話への意欲が飛躍的に向上した。 ○ 英語力だけでなく人として向き合うことでコミュニケーションが図れる事を体験できた。 	<p>度へスムーズな引き継ぎを行うことが必要である。</p>
--	--------------------------------

(ウ) 事後アンケート (一部抜粋)

質 問 項 目		
修学旅行の目的	外国の言語・歴史・文化・習慣等を実際に自分で見聞き、平素の学習では得ることのできない経験を通して、視野を広め国際感覚を身につける。	達成できた … 67% どちらでもない … 25% あまり達成できなかった … 8%
	集団行動を通して、規律を守り、協力し合う心を養うとともに、集団生活の中で、教師と生徒、生徒同士の人間関係をより豊かなものにします。	達成できた … 78% どちらでもない … 15% あまり達成できなかった … 7%
	海外での異文化体験を通して、日本文化を再認識する。	達成できた … 75% どちらでもない … 17% あまり達成できなかった … 8%
感想	ハワイ修学旅行を終えて	とても楽しかった … 42% 楽しかった … 36% どちらでもない … 10% 不安だった … 5% とても不安だった … 7%



夕食会で現地高校生とフラダンス



ワイメア高校での植樹式

(エ) 今後の展望

カウアイ島での現地高校生との交流に加え、オアフ島での滞在班別自主研修など、例年とは異なる日程であったが、今年度の研修も有意義なものとなった。今回は、前回交流したワイメア高校と引き続き交流することができ、去年から参加している現地の高校生と教員のおかげで、生徒達は短い期間に充実した交流を持つことが可能となった。生徒達は旅行前から準備してきた日本文化紹介や現地の生徒との交流に積極的に取り組んだ。また、初めて触れる人や文化に、感動し、圧倒され、国際感覚を養う上で、貴重な第一歩を踏み出したと言える。帰国後、手紙のやりとりやグリーティングカードの作成など、交流を続けているが、英会話学習に対する意欲や異文化に対する興味を持続させるような活動をさらに組み込んでいくことが必要であろう。

(4) 「6年間を見通した進路指導」の取組み

進路指導部では、生徒一人ひとりが自己の在り方生き方を考え、将来に対する目的意識をもって主体的に進路を決定し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができる能力や態度を育成することを目標としている。そして、生徒一人ひとりの夢を実現させるために、次の2点を主眼として研究を進めている。

- 生徒一人ひとりが具体的な夢を思い描ける力を養わせること
- その夢を実現する方策を知り、継続的に努力する姿勢を養わせること

ア 進路指導目標

- 中高6年間を見通した段階的・継続的な学習活動やテーマ学習を通して、自己の特性や適性について理解し、自分の在り方生き方を考えつつ具体的な進路設計をする。
- 進路実現のためには学ぶことが必要不可欠であることを自覚し、主体的な学習習慣を確立させ、一人ひとりの学力の向上を図る。
- さまざまな体験学習に積極的に参加することによって進路実現への意欲を高めるとともに、社会的視野を広げ職業観・勤労観を培う。
- 自己実現に向け、継続的な努力を続ける姿勢・能力を育てる。

イ 中高6年間の指導計画

	目標	学習内容	テーマ学習・体験的学習
中学1年	中学校の生活や学習内容を知り、将来の夢や生き方を考える	・学ぶことの目的と意義を理解し、中高一貫教育等の制度と機会を知る ・中学校生活に慣れるとともに、心身の健康と安全な生活の実践力を身につける ・意欲的計画的に学習に取り組む姿勢を身につける	オリエンテーション
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			BS学習

中学 2年	自分の特徴や適性を知り、自分の力を高めながら、進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験等を通して、働くことの目的と意義を理解し、自分の進路計画を立てる ・自己を見つめる手だてを探り、集団と自己のかかわりについて考える ・学習の悩みに対する解決方法を探り、自分にあった学習方法を考える 	職場体験
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			B S 学習
中学 3年	自己の在り方生き方を考え、適切な進路を選択する	<ul style="list-style-type: none"> ・将来に対する具体的な目標を立て、夢の実現をめざすための高校生活を展望する ・先人(先輩)の姿に学ぶことにより、自他の不安や悩みの解決方法を探り、自己の在り方生き方について考える ・学ぶことの目的を明確にし、その姿勢の習慣化を図る 	高校見学、体験入学
			ボランティア活動
			自己の在り方生き方
			B S 学習
高校 1年	自己理解を深め、将来に対する明確な目標をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・こうなりたいという自分の将来像を描いていく過程において、自己の特性や適性を理解する ・将来の進路を見据えた科目選択の能力を身につける ・主体的継続的な学習の定着を図り、自分の学習スタイルを確立する 	安高セミナー
			進路適性検査
			ボランティア活動
			私の主張発表大会
高校 2年	自分の目標を実現するための明確な進路計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化体験等を通して、社会に対する視野をさらに広め、グローバルな感覚を身につける ・学校生活を見直し、校外活動等へ積極的に参加することにより、自己と社会のかかわりについて考える ・自分の進路に向けて、基礎学力の定着と応用力の養成を図る 	ハワイ修学旅行
			ボランティア活動
			オープンキャンパス参加
			私の主張発表大会
高校 3年	自分で描いた将来像に基づいて自己実現を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の在り方生き方をふまえて夢の実現を追求する ・具体的な志望動機に基づいて学習を充実させる ・卒業後の新たなスタートにチャレンジしようとする意欲を高める 	ボランティア活動
			オープンキャンパス参加
			各種説明会

ウ 取組み

○ 中学校での中核的な取組み

1年	職業しらべ	自分の適性に気づき、身近な人の職業について調べることによって、将来の進路を計画しようとする態度を養う
2年	職場体験	身近な職場を体験することによって、働くことの目的と意義について考える
3年	上級学校訪問	自分の夢を実現できる進路の焦点化を図る

○ 高等学校での中核的な取組み

1年	職業研究	どのような職業に関心があるのか、文理選択とからめて検討する。
	ボランティア活動	社会に対する視野を広め、様々な体験を通して自己の在り方生き方を発見する
2年	ボランティア活動	
	オープンキャンパス参加	夢を実現するための進路を具体的に検討して、進路設計構築の一助とする
3年	オープンキャンパス参加	

○ 中学生を対象としたキャリアセミナー

安下庄高等学校の第3学年の進路内定者が連携中学校を訪れ、自分の進路決定までの体験を中心に高等学校での学習の取組みや部活動などの高校生活についての話をし、中学生が自己の在り方生き方について考える手がかりの一助としている。



安下庄中学校での発表の様子

エ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校教員による交流授業が定期的に行われており、中学生の進学意識を伸ばす上でも効果的である。 ○ 高校生の進路内定者が中学校を訪問し、進路決定までの経緯や受験勉強の様子、高校生活のことなどを中学生に話すキャリアセミナーは概ね好評であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高間でより一貫性のある進路指導の在り方を考える必要がある。 ○ 将来設計能力を涵養できる進路支援に関する研究をする必要がある。 ○ 安下庄高等学校の生徒の進路に対する取組みが中学生に見えるよう、キャリアセミナーなどの企画を今後も積極的に行っていきたい。

オ 今後の展望

生徒一人ひとりが自分の夢を実現するためには、各人が具体的な将来設計図を描き、その実現に向けて努力していく環境づくりが不可欠である。また、生徒が夢の実現を図る場合に最も大切なものは本人の意欲であろう。生徒が具体的な将来設計図を描く力と、自分の夢を実現するために主体的に取り組む意欲とは相互補完するものであると考える。このことを念頭に、以下に挙げる課題に対する具体的な支援方法について検討していく必要がある。

- 基礎基本となる学力の充実・向上を図る
- 生徒自身が自らの在り方生き方について考えるきっかけとなる体験学習や多様な職種の職業人の話を聞く場などを企画・設定する
- 自己実現のために必要な課題発見・解決力やコミュニケーション力、表現力の向上を図る

(5) 「6年間を見通した生徒指導」の取組み

ア 生徒指導目標

本地域において、生徒一人ひとりが自らの夢を思い描き、それを実現していくための支援として、生徒指導の立場から何ができるかを検討するにあたり、その大きな目標を以下のように定めた。

イ 中高6年間の指導計画

生徒指導目標を達成するための指導内容を検討する過程において、6年間の連続した流れの中で、生徒一人ひとりが自らをみつめ、アイデンティティを確立し、その上で夢を実現していくことができる能力と豊かな人間性とを身に付けるために、各学年で必要とされる発達課題や指導内容についての再検討を試み、「中高6年間の指導計画」と「生徒指導計画」を作成した。そして、この「中高6年間の指導計画」と「生徒指導目標」をもとに、十分な生徒理解に基づいた継続的で一貫した指導に努めてきた。今年度は、昨年度に引き続きこれらの目標や計画の実践を行いながら、必要な修正を加える年であった。

	目 標	指 導 内 容	体験学習	関連活動
中学 1年	集団の一員として夢を持って生活する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな集団への適応を支援する ・ 基本的な生活習慣が身に付くよう、きめ細かな指導をする ・ カウンセリング等を通じて、能力・適性などの個々の情報の把握に努める 	私の主張発表大会 ふれあいみかん収穫作業 ふれあいマラソン大会 ボランティア活動	集団宿泊 職業体験学習
中学 2年	基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人ひとりが集団の向上に参加できるように配慮する ・ 基本的な生活習慣の確立を図り、正しい判断力を養う ・ 一人ひとりの心身の発達の差を考慮した援助に努める 		カウンセリング活動 修学旅行
中学 3年	自己の能力や可能性を認識する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の中での自分の立場を理解し、行動することができる力を育てる ・ 社会のルールを認識し、実践できる能力を育成する ・ 自分の不安や悩みを把握し、適切に対応できるよう支援する 		ボランティア活動 安高セミナー
高校 1年	自分を見つめアイデンティティの確立を図る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ふれあい活動」で培った人間関係を基に新たな集団を構築できるよう支援する ・ 社会の中の自分の立場を理解し、自己責任能力を高めるよう指導する ・ 連携校からの情報を基に、継続的なカウンセリング活動に努める 		ボランティア活動 ハワイ修学旅行
高校 2年	自己を高め、主体的に生きていく姿勢を身につける	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者との関係の中から、自らを高める姿勢を養う ・ 自己指導能力と社会的な自己責任能力を育てる ・ 自己を相対化し、視野を広げる中で、悩みを解決する力を育てるよう支援する 		体育祭など
高校 3年	自己の在り方に明確な考えをもち、夢の実現をめざす	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一貫校の最上級生としての立場を理解し、リーダーシップが取れる力を養う ・ 民主社会を構成する市民としての自覚と責任を身につける ・ 自立した個人として生きていく力を獲得できるよう支援する 		

ウ 生徒指導年間計画

中高で一貫した生徒指導をめざすため、従来各学校で単独に行っていた様々な指導について、生徒指導に関連した行事と、生徒指導に密接な関係のある性教育及び人権教育をまとめ、6年間の中での位置づけを明確にし、一貫した指導を目指した(下表)。

(○学校行事、◎ホームルーム活動、※人権活動と関係が深いもの)

(ア) 中学校

	1年	2年	3年
4月	◎学級づくり	◎学年始めオリエンテーション ◎2年になっての中学生生活	◎学年始めオリエンテーション ◎3年になっての中学生生活
5月	○チャレンジキャンプ	◎生徒総会へ向けて	◎生徒総会へ向けて ◎修学旅行関係
6月	◎生徒総会へ向けて ○高等学校文化祭見学 ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ○高等学校文化祭見学 ○いのちの大切さを考える講演	◎生徒総会へ向けて ※「岐路に立つ」 ○高等学校文化祭見学 ○いのちの大切さを考える講演
7月	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方	○ボランティア活動 ◎夏休みの過ごし方
8月			
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別について考える ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ※差別と偏見 ◎運動会に向けて	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭へのリレー選手参加 ◎運動会に向けて
10月	○ふれあいマラソン ◎文化祭に向けて	○ふれあいマラソン ◎文化祭に向けて	◎文化祭に向けて ○ふれあいマラソン ※平等な社会を目指して
11月	○ふれあいみかん収穫作業 ○高等学校の修学旅行の報告 (中学校の文化祭において)	○ふれあいみかん収穫作業 ○高等学校の修学旅行の報告 (中学校の文化祭において)	○ふれあいみかん収穫作業 ○高等学校の修学旅行の報告 (中学校の文化祭において)
12月	◎冬休みの過ごし方	◎冬休みの過ごし方	◎冬休みの過ごし方
1月	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会
2月	◎卒業式への取組み	◎卒業式への取組み	◎卒業にあたって ※人類愛
3月	◎2年生となる心構え	◎最上級生となる心構え	◎三年間を振り返って

(イ) 高等学校

	1 年	2 年	3 年
4月	○安高セミナー	◎ホームルームづくり	◎ホームルームづくり
5月	○生徒総会 ○旧担任によるカウンセリング	○生徒総会	○生徒総会
6月	○文化祭 ○中学校教諭によるカウンセリング	○文化祭 ○中学校教諭によるカウンセリング	○文化祭
7月	※人権意識調査・標語募集		
8月	○ボランティア活動	○ボランティア活動	○ボランティア活動
9月	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭	◎学期始めオリエンテーション ○体育祭
10月	○ふれあいマラソン ○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○ふれあいマラソン ○ハワイ修学旅行 ○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室 ○中学校養護教諭によるカウンセリング	○ふれあいマラソン ○薬物乱用ダメ、ゼッタイ教室
11月	※高齢者問題 ○ふれあいみかん収穫作業	○ふれあいみかん収穫作業	※社会生活と人権問題
12月			
1月	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会	◎学期始めオリエンテーション ○私の主張発表大会
2月	※エイズと人権 ○中学校教諭によるカウンセリング	○中学校教諭によるカウンセリング	◎卒業にあたって
3月			○卒業式

エ 取組み

○ 共通理解

(ア) 学級経営方針と指導計画の一致

各クラスの学級経営方針を中高6年間の指導計画に準じたものに共通化し、指導の統一を図った。

(例) A中学校2年生学級経営案

平成17年度学級経営方針	
担任	第2学年
生徒数	男子 14名 女子 13名 計 27名
基本方針	<ul style="list-style-type: none"> ・【和と笑顔】思いやりの心で行動でき、一人ひとりが集団の向上に参加できるような学級にする。 ・自己実現へ向けて将来の夢や生き方を考えることができるよう支援する。 ・中堅学年としての自覚を持ち、集団の一員として夢を持って生活できるような力を育てる。
学級の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・全体として、素直で、よく気がつき、協力して活動ができる。 ・時と場に応じた言葉遣いや行動が身につけていない生徒が多い。 ・過去にあった人間関係の不調和から抜け出しきれない生徒もある。 ・授業には落ち着いた態度で取り組めるが、家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多く、また、特別な学習支援を必要とする生徒がいる。 ・部活動に意欲をみせる生徒が多い。
経営の努力点	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣が身につく、正しい判断力が持てるように、具体的な場面を捉えたきめ細かな指導に努める。 ・学ぶことの目的と意義を理解させ、発達段階に応じた適切な進路指導を行う。また、中高一貫教育等の制度と機会を知らせる。 ・生徒指導においても中高の連携を図り、将来を見越した生活を送ることのできる態度を身につけさせる。 ・学習意欲を高め、計画的に学習に取り組めるようにする。 ・心身の健康に留意し、安全な生活が送れるようにする。 ・自分や他人の良さを認め合い、前向きに物事を考ようとする心情を育てる。 ・様々な場面で、集団への適応を支援する。 ・教育相談等を通して、能力・適性など、個々の情報の把握に努める。

○ 豊かな人間性の形成とアイデンティティの確立

少子化など様々な理由により、現代では年代が異なる世代間での交流が非常に希薄なものとなってしまった。その結果、リーダーシップや先輩を敬う気持ちが減退し、豊かな人間性の形成につながる体験が激減してしまったと言える。

我々は中高合同での体験的な学校行事により、生徒たちに世代を越えた交流とその体験から豊かな人間性が生み出されることを期待し、「体験的な学習を重視した学校行事」(p.28)で詳述されているようないろいろな取組みを実践してきた。今年度、改善を加え実践したことを述べてみたい。

(ア) ボランティア活動

一昨年までのふれあいクリーン作戦は、昨年度各学校の地域の実情を生かしたボランティア活動へと発展的に解消したが、その結果、小回りのきく地域のニーズに応じたボランティア活動になったため、地域の人々により感謝されるものとなり発展を続けている。特に高齢化の進んだこの地区での若い力のボランティアは、われわれの予想以上に頼りにされている。

(イ) ハワイ修学旅行(10月)

中高6年間の中で、海外旅行により異文化を実体験できることは、生徒の視野を

広げ、人間性の成長に及ぼす影響は極めて大きいものがある。今年度は現地のワイメア高校に暖かく迎えてもらい、様々なお互いの文化を紹介することで貴重な国際交流を実施することができた。

今後は保護者の負担増加にどう対応するかが課題である。

(ウ) ふれあいマラソン大会 (11月)

季節はずれの寒さであったが、それを吹き飛ばす熱気あふれるマラソン大会であった。この大会も生徒達にはすっかり定着しており、レース前後に先輩後輩の間で談笑する姿が微笑ましく感じられた。

(エ) ふれあいみかん収穫作業 (12月)

広い農園ではリーダーの高校生の指示が的確なほど作業が効率よく進むため、高校生のリーダーシップを育成するのにふさわしい行事である。今年も昨年同様、どのようなリーダーシップが求められているのかを高校生に自覚させる事前指導に時間を割き、生徒達の献身的な活動を引き出すことができた。

○ カウンセリング活動

(ア) 中学校教諭によるカウンセリング

昨年と同様、高校1年生を主な対象とし、各中学校の教諭によるカウンセリング活動を実施した。放課後の時間を利用して、中学校の教諭が来校し、相談室で実施した。例年、1学期はできるだけ最も親しみのある旧担任によるカウンセリングを実施しており、出身中学校の大部分の生徒が訪れた。最初は全体での懇談会のような形になったが、その後、希望する生徒のカウンセリングを行った。また、今年度はこのカウンセリングも定着してきたため、2, 3年生も中学校の先生に挨拶をするなど、たくさん訪れたのが特徴であった。終了後、現担任を含めて教員間での情報交換を行い生徒理解に努めた。

(イ) 養護教諭によるカウンセリング

本年度も2学期には養護教諭部会と協力して、中学校の養護教諭によるカウンセリング活動を実施し、その後情報交換を行った。特に心身の発達を中心にかかわってきた養護教諭の視点からの生徒理解は、生徒にとっても教員にとっても非常に有意義なものであった。また、中学校時代に養護教諭との関わりが強かった生徒については、今後の対応等も検討することができた。

生徒の感想をいくつか紹介しておく。

- ・成長した自分を見てもらえて嬉しかった。
- ・誰にも相談できなかった悩みを相談できホッとした。
- ・大人の意見を聞くことができ、参考になった。
- ・久しぶりに出会えて懐かしかった。また、昔の自分を冷静に見つめ直すことができた。

○ 安高セミナー

今年度、入学生徒の65名は14校の中学校から集まっているが、その内8校は1学年1クラスの小規模な中学校の出身である。また、小学校から9年間にわたってほぼ同じ人間関係の中にいた生徒も多い。こういった新しい人間関係の構築に不慣れな生徒達にとって、高校入学直後の指導は非常に重要である。そのために設けた宿泊行事が「安高セミナー」である(本年度は4月13日～14日)。宿泊行事が生徒達の親睦に有効であることは誰もが知りながらも、授業時間数の確保や経済的な問題から実施できない学校が最近は多くなっている。幸い本校より3kmの位置に、県の宿泊訓練施設である「大島青年の家」があるので現地集合現地解散で経

済的負担も少なく、また、入学時のオリエンテーションを兼ねることで授業時数への影響をできるだけおさえて実施している。

特に今年度は、これまでの反省に基づき、集団行動や規範意識、また本来は家庭で行われているべき基本的生活習慣の徹底に力を注いだ。「大島青年の家」の全面的な協力のもと、アブピーからカッターボードまでの訓練をほとんどの生徒がやり遂げ、生徒達に新鮮な一体感、達成感が生じたことが感想から伺えた。また、セミナー終了後、翌朝のホームルームで、異なる出身中学校の生徒達が談笑しているのを見るのは大変嬉しいものである。

オ 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ カウンセリング活動は軌道に乗ってきており、発達段階に即した的確な情報交換ができる。 ○ 少子化の中、失われがちな異年齢間での人間関係が形成できる。 ○ 年度当初の部会（養護教諭部会）での情報交換の場があり、有意義であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本来家庭で身に付けておくべき基本的生活習慣が、年々低下してきている。これに対して中高の6年間でどのように指導していくかを考えるべきである。 ○ 7月に実施している地区別懇談会で、保護者に対し家庭での基本的生活習慣の確立を働きかけているが、より徹底させるために、懇談会への出席率を上げるよう努める必要がある。

カ 今後の展望

中高で一貫した生徒の指導の効果を高めるためにも、今後は一層、中高の生徒指導部で統一した基準を打ち出し、それに準じた指導を各校で行うことを検討する必要がある。今後も中高6年間を通して、生活指導・服装指導を継続して指導する。さらに、中高教員によるカウンセリング活動を一層充実させるよう検討する。

(6) 各教科での取組み

ア 国語科

～数値化できない学力充実の方法の研究～

(ア) 取組み

- 6年間を見通した古典の指導についての研究
- 思考力を高めるための読書指導についての研究
- 豊かな表現力をはぐくむための指導についての研究
- 定期テストにおける共通問題を更に充実させるための研究

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none">○ 中学校と高校における古典学習が有機的につながり、指導の連続性が増すことになった。特に、「安下庄高校の求める5教科の力」で具体的な項目を挙げることによって、中高のつながりをより意識することができた。○ 古典に興味を持つ生徒が増えてきた。○ 中学校で「朝の読書」を継続してきた生徒の思考力が高まっていることに加え、集中力もでてきた。また、読書会や、読書感想文コンクールに興味を持つ生徒が増え、意欲的な作品が数多くあった。○ 自らの中に書くべきテーマを持たせるために、ホームルーム活動や特別活動と連携しながら表現指導を展開することができた。○ 定期テストの共通問題を観点別に設けることで、生徒の実態把握がより明確になった。	<ul style="list-style-type: none">○ 思考力をさらに伸ばしていくために、中学校及び、高校での日常的な読書指導を授業等の時間を使って、継続していきたい。○ 物事を多角的にとらえる習慣を身につけさせるために、学習形態を更に工夫する必要がある。また、6年間を通じて、豊かな表現力をはぐくむための連携した指導の工夫をしたい。○ 学力観についての共通理解を一層深めていきたい。

(ウ) 今後の展望

読む力、書く力を育てることは容易なことではない。何より生徒一人ひとりが種々の物事に興味関心を抱き、思索しながら日々を生きていく姿勢を獲得することが肝要である。そのために、中高で継続的に読書指導を行い、生徒達に読書の習慣を身につけさせることは、必要不可欠なものである。また、時には、中高の担当者が、教科を超えて十分な協議を重ね、総合的な学力を高めるための方策を考えていくことも必要である。

イ 社会科

(ア) 取組み

- 中学校社会科公民的分野及び高等学校公民科「現代社会」における
 考査問題の比較・考察
- 中学校間で共通化した単元テストの結果等を参考に、中高での生徒
 の定着度の低い分野についての分析・考察
- 研究授業の実施
- ガイドラインの再検討

(イ) 成果と課題

a テストの結果の生徒へのフィードバックについて

中学校において、単元テストを積極的に実施し、その結果を速やかに授業に反映させることで、生徒の学力向上をめざした。年に数回の定期考査と比較して、生徒へのフィードバックが効率的に行える利点がある。また、比較的狭い範囲で実施する単元テストは、生徒にとっても目標が立てやすく、常に気を抜かずに勉強させるには有効な方法であるように思われる。

高校の教員にとっても、実際の問題用紙と生徒の解答を見た方が、数字だけの分析よりも、生徒の状況が分かりやすいという意見も出た。

b 研究授業の実施について

例 主題「地球家族」(中学校地理・公民分野)

対象生徒 第1～第3学年 28名

異年齢集団で学習を展開する事により、さまざまな意見や考え方を引き出すかたちの授業を設定した。具体的には、フォトランゲージの手法を使用した。『「地球家族」－世界30カ国のふつうの暮らし フォトランゲージ版』の中から6カ国の写真を使い、そこから気候などの地理的情報やその家族の暮らしなどを読みとり、各班で発表させた。また、その写真から各国の情勢や社会的な諸問題を考察させた。

高校の教員や連携中学校教員もアドバイザーとして授業にも参加した。

研究授業後の研究協議などを通じて、中高双方の生徒の実態、授業の実態、身につけておきたい学力などに関して相互理解が進んだことが最も大きな成果である。また、実態把握だけでなく、発達年齢に応じた指導の工夫などについても、改めて考えるよい機会となった。

(ウ) 今後の展望

連携3中学校では、基礎学力の向上を目標にして単元テストの共通化に取り組んでいる。これは基礎基本を定着させるのに有効なだけでなく、自主的に学習する習慣や意欲づけにもつながっていくと考えられる。この習慣を高校でさらに定着させることによって学力を向上させ、生徒一人ひとりが希望する進路を実現させたい。今後は高校卒業時の進路選択を意識した中高間の連携の在り方を追究していきたい。

ウ 数学科

(ア) 取組み

- 交流授業の取組みの工夫・改善
- 学力向上のための指導(ゆとりを生かした学習)

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<p>○ 高校における交流授業では、中学校教員が発展と基礎の両コースを自由に行き来し、両方の生徒の実態を把握できるようにした。</p> <p>○ 中学における交流授業ではB Sの時間に習熟度別授業として高校の教員が単独での指導も行い、個に応じた指導の充実を図った。</p> <p>○ ゆとりを生かした学習会では実際に高校で授業を行ったことにより、高校での学習に対する姿勢を認識させ、家庭学習の大切さを意識付けることができた。</p>	<p>○ 中学では数学担当教員が各学校とも一人である。共通テストの実施や学力充実システムの入力など、連携型中高一貫教育による独自のシステムについて、異動により新たに來られた先生には連絡・確認を充分にする必要がある。</p>

(ウ) 今後の展望

交流授業において、より効果的な授業が展開できるよう、今後とも工夫・改善を行っていききたい。

エ 理科

～基礎学力定着システムについて～

(ア) これまでの取組み

6年間を見通した学習指導計画（高校ではシラバス）をもとに、連携中学校間の定期テストの共通化とテスト結果を分析した。「なぜ原子や分子の学習が定着しないか」から端を発し、「発展的な内容により興味をつなぐことができるのではないか」、そして「どのような内容を学習に取り入れるか」を検討し、中学生に対し発展的な内容の学習を高校の教員とのT・Tを取り入れることがより効果的であるとの一つの結論に達し、化学分野の単元「物質のつくり」で昨年度計画し実践した。

(資料1) イオン等の発展学習を行った安下庄中学校と、他校（東和・日良居中学校）との比較

(数値は全て%で表されている。また2段階目以降は、前段の通過者に対する割合を示している。)

(1) アンモニアの合成 (3校とも出題)
安中 (日+東)

アンモニアの合成	通過	通過
1 化学式で表す	75%	45%
2 窒素の数をそろえる	67%	86%
3 水素の数をそろえる	76%	42%

- ・ 安中の方が化学式で表す段階での誤答が少ない。
- ・ 窒素の数をそろえる段階での差はないが、水素の数をそろえる段階での差が大きい。明らかな誤答 (H₃など) が少ないものと思われる。

(2) メタンの燃焼 (安中と日良居中のみ実施)

安中 日良居中

メタンの燃焼	通過	通過
1 化学式で表す	88%	80%
2 水素の数をそろえる	65%	100%
3 酸素の数をそろえる	79%	75%

- ・ 安中の方が、化学式で表す段階での誤答が少ない。
- ・ 水素の数、酸素の数をそろえる段階での差は見られない。

(日良居中の受験者数は5名であり、内3名は化学反応式の作り方について良く理解し、科学的思考力も高い者であるため、数値が若干高くなっている。100名程度の集団として考えると、実質的にはこの数値の6～8割程度と考えられる。)

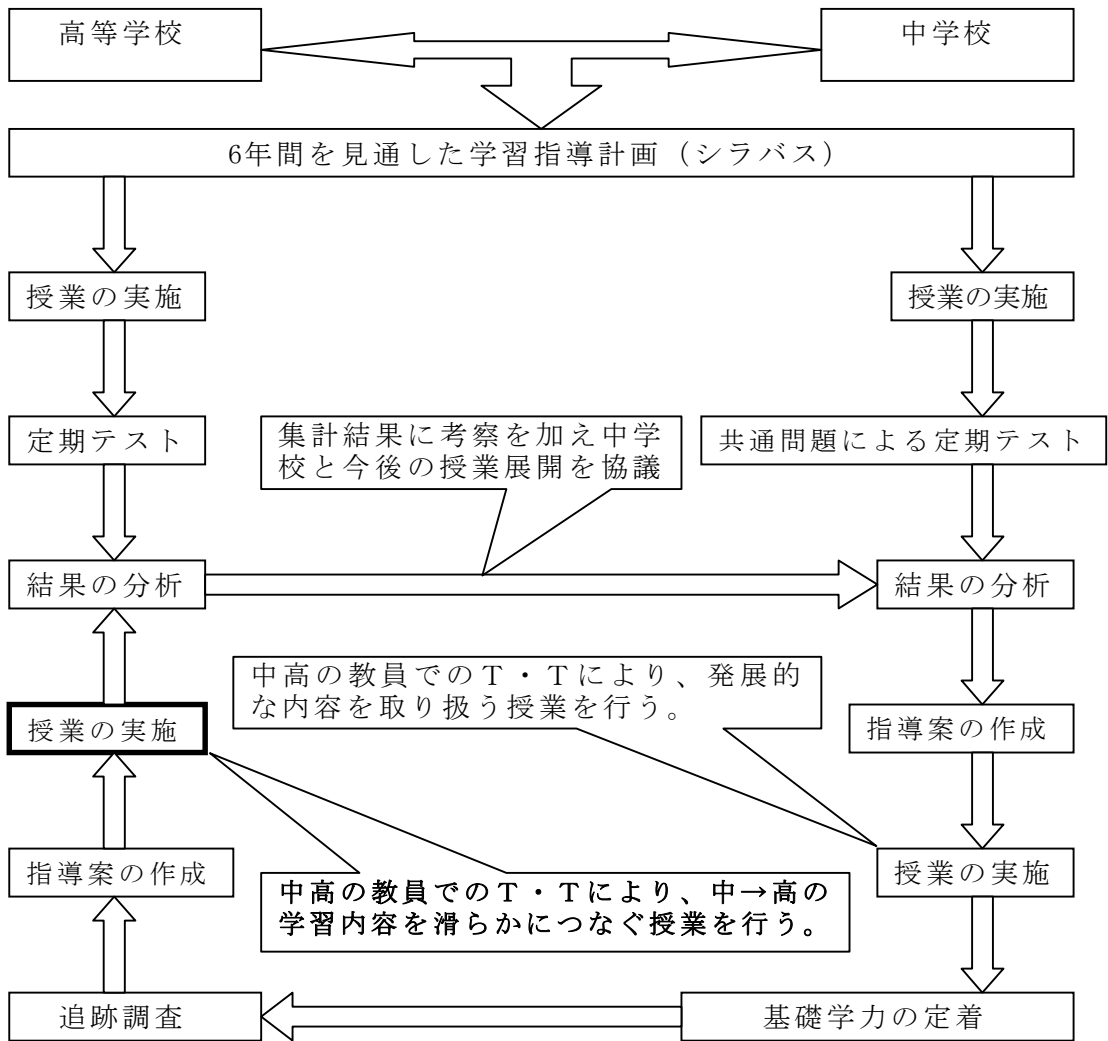
(イ) 今年度の取組み

今回、新たな取組みとして、高校での[結果の分析]から高校での[授業の実施]にフィードバックする過程で、中学校の教員とのT・Tを取り入れた。

実施した単元は、理科総合Aの物理分野の「力学的エネルギー」で、過年度の高校の定期考査のデータの分析により、これまで定着度の低かった「加速度の概念と力の関係」について生徒の理解を深めることを目標とする。

この分野につながる中学校での「力」の単元による問題の得点率は、7割に達しているが、高校に入り、「力と加速度の関係」・「力と仕事の関係」・「仕事とエネルギーの関係」と進んでいくにしたがって、定着度が低下していることは、これまでのデータから明らかである。

今回の試みにより、学年末でのデータがどのようになるか見ていきたい。



「中高の教員でのT・Tにより、中→高の学習内容を滑らかにつなぐ授業」の風景

(ウ) 実践事例

学習指導案			
<ul style="list-style-type: none"> ・ T 1 安下庄高校教諭 宮本 孝雄 ・ T 2 東和中学校教諭 松村 道夫 			
	学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	力と速さについての復習 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 速度と加速度及び重力について復習する。 ・ T 2 が、斜面上を滑る物体の運動の仕方について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ T 2 により中学校での学習・実験を振り返る。
展 開	実験の説明 実験 考察 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイマーとテープの使い方を理解する。 ・ T 1 と T 2 でタイマーの打点間の距離について演示する。 ・ 各班で2回実験し、二人一組で各自のテープを受け取り、切り離す準備をする。 ・ テープを方眼紙に貼り付け、データを求める作業に入る。 ・ 挙手により求めたデータを調べる。 ・ 本時の実験から得られる結論をまとめさせる。 ・ 誤差について考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイマーのしくみを理解する。 ・ 6打点で分け、テープに番号を付けることを指示する。 ・ データから加速度を求めさせる。 ・ 摩擦や抵抗についてふれる。
ま と め	まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今日の内容を確認する。 ・ 空気抵抗に関して考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 真空ポンプの利用。
<p>○ 連携3中学校教諭による授業を参観しての感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 加速度の概念は、中学では「だんだん早くなる」程度しか扱わない。高校になって「加速度」を数量的に扱うことで、生徒が戸惑わないように、実験の仕方・データの処理の仕方など中学校ですでにできる事を徹底していきたい。 ・ 中学校と高校の教科書の内容を見比べてみて、ギャップを感じるので、中学生がスムーズに高校で学ぶ概念に入れるように、このギャップを中高の教員で協力して埋めていく必要を感じた。 ・ 生徒一人ひとりが「データをとろう」「データを処理しよう」という姿勢が見られてとてもよかった。 ・ 中学校で学んだことが、高校に行っても関係するのだという事を意識してT2の説明をした。 ・ 測定するとき、紙テープがまっすぐ記録タイマーを通るように、気をつける班と、そうでない班とが見られた。 <p>○ 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ろ重力加速度の測定数値がほぼ8～9 (全体の平均8.6) であることから、紙テープの抵抗を考慮すると、生徒は正確に計測出来たものと思われる。今後、「力と仕事の関係」・「仕事とエネルギーの関係」への理解を深める為の学習展開を考える必要がある。 			

(エ) 今後の課題

これまで生物分野（ニワトリの解剖）・化学分野（原子の構造）・物理分野（重力加速度の測定）と中高のT・Tによる取組みを続けてきたので、来年度は地学分野で中高の教員でどのような協力出来るか検討していきたい。

オ 英語科

(ア) 取組み

- 中学校におけるE S英会話の授業内容の充実・発展と、高校教員の指導方法の工夫・改善
- 中学校・高校における英会話力の礎となる基礎英語力の増強
- 中学校での交流授業における高校教員による単独指導の試み
- 定期テスト問題や交流授業における授業案等の情報の共有化
- ガイドライン作成による中高教員の情報交換の活発化

○ 中高6年間の指導目標と学習内容例

	目 標	学 習 内 容 例
中 2 ～ 中 3	英語の音声に慣れ、英語を話したり聞いたりする楽しさを体感する	ゲーム・歌 発音・イントネーション 挨拶 英語劇 自分のことを言ってみる （自己紹介、好きなもの、できることなど） 気持ちを伝える （お礼、謝罪など） 相手に聞いてみる （質問、依頼など）
	異文化に対する興味を持つ	海外の行事を知ろう （クリスマス、ハロウィンなど）
高 1	簡単な会話のやりとりができる	ペアワーク（質問⇔返答） （自己紹介、質問、依頼など） ALTへのインタビュー 相づちをうつ ジェスチャー
	異文化に対する興味を深める	アメリカの行事 アメリカの高校生の学校生活

高 2	適切な場面で適切な会話ができる	ホームステイ先での会話 (自己紹介、家族について、困ったときなど) 空港・飛行機内での会話 (入国審査、フライトアテンダントとの会話) ショッピング・レストランでの会話 (アドバイスを求める、注文をするなど)
	ハワイでの経験を通して異文化に対する理解を深める	ハワイ・カウアイ島について カウアイ島内の高校について エアメールの書き方 ハワイの高校生との手紙交換
高 3	相手の意見を受けて自分の意見を言える	感想を述べ合う 討論
	国際的な視野に立ち、異文化に積極的に関わろうとする。	ニュース・映画・音楽 自国の文化の紹介 カウアイ島のホスト生徒との交流の継続

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高共に相互の指導内容や生徒の学習の進捗状況が把握でき、自校で補強すべき点が明確になった。 ○ 中高間の共通理解を徹底し、交流授業の回数を確保することで、より継続的、段階的な指導を行うことができた。 ○ 中高共に交流授業において、基礎英語力の増強を試み、生徒の実態を把握することができた。 ○ 安下庄中学校の交流授業（BS）では、高校教員がガイドラインに基づいた教材を作成し、単独授業を行った。繰り返し解説・演習を行うことで、高校の学習内容を意識したより発展的な授業を展開することができた。 ○ ガイドライン改訂のための中高教員間の協議がさらに活発化し、大幅な見直しが可能になった。また、協議を行うことで、中学生・高校生相互の学習状況の把握が深まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T・Tの指導法の改善が必要である。 ○ 各授業の前の中高教員間の十分な協議時間の確保が必要である。 ○ 指導目標に基づいた授業内容をより充実させる必要がある。 ○ 単独授業における評価については、中学校教諭との基準の統一を図る等、十分な協議を行う必要がある。

<ul style="list-style-type: none"> ○ 中学校教員と高校常駐のALTが連携してスピーチコンテストに参加する中学生の指導を行った。 ○ 学力充実システムについて、中高間の活発な意見交換が行われた。 	
--	--

(ウ) 今後の展望

今年度ガイドラインの改訂が進んだが、中高ともにガイドラインを活用し、内容を充実させるために、中高教員相互の協議をさらに深めていくことが重要である。

交流授業については、今年度より、英会話力の向上を目指す上で基礎となる英語力の増強を目指し、高校では従来のOC Iの授業に変わり、英語I（グラマー）の授業を交流で行うこととなった。また、安下庄中学校では新たにBSの時間に高校教員による単独授業を試み、成果を収めた。今後、生徒のさらなる英語力向上を目指し、実態に即した指導を展開するために、これらの試みに関する中高間の教員によるいっそうの協議が期待される。また、T・T指導については、中学校の通常授業とES英会話、高校の英語Iの授業で行っているが、各学校の時間割作成上の制約などから、事前になかなか十分な協議時間を確保することが難しかった。

本地域の英語科として6年間を見通した継続的な英会話指導を十分に行う上でも、多方面に渡る条件整備が望まれる。

また、今年度、中学校の英語教員の大幅な異動があり、中高間での共通理解を図るために忌憚ない意見の交換がなされた。今後さらに課題の明確化とその改善に向けた協議が行われる事が期待される。

カ 音楽科

(ア) 取組み

<ul style="list-style-type: none"> ○ 効果的なT・Tの在り方についての研究・実践 ○ 授業毎における簡単な授業案の作成、役割の確認

(イ) 成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 合唱指導におけるパート練習で、T1・T2がそれぞれ女声・男声パートに分かれて指導することで効率の良い練習ができる。 ○ 授業案を作成することで、T1・T2の役割分担を明確にすることができる。 ○ 中学生の音楽に対する関心や技能を把握することができ、高校での指導の際に、より個に応じた指導が展開できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 女声・男声に分かれての指導が多かったため、学級の全体像が見えにくい面がある。 ○ 教員が指示しているときの私語が気になることがある。授業規律についても取り組む必要がある。 ○ パート練習の形態については、ひとりでも多くの生徒とかかわりを持てるように、指導するパートを分担する必要がある。

(ウ) 今後の展望

T・Tの指導のあり方については、授業案の作成など事前の準備を徹底して、各時間における目標を明確にしたうえで、より効果的な指導を行っていきたい。

歌唱指導では教員が女声・男声それぞれの範唱をすることで、生徒により具体的な目標を持たせるようにしたい。また、T1・T2の専門性を生かし歌唱・器楽・鑑賞など幅広い分野でT・Tでの指導にも取り組んでいきたい。

中学生の音楽に関する能力・適性、興味・関心を把握し、それを高校での指導で生かすことにより系統的な情操教育を行っていきたい。

キ 保健体育科

(ア) 取組み

- 中・長距離走の授業における練習方法の工夫・改善

連携校では、柔道を武道の共通選択種目とし、中学校で得た柔道の技能を、いかにして高等学校で発展させるかをテーマに研修を重ね、柔道の基礎・基本から発展した指導法まで共通化し実践研究を行ってきた。

今年度は、近年の生徒達の体力面の低下や我慢強さやねばり強さなどに欠けるといふ点に着目し、「中・長距離走の授業における練習方法の工夫・改善」を課題とし取り組むこととした。

(イ) 成果と課題

成 果	課 題
○ 中長距離走といえば生徒達が最も嫌がる種目ではあるが、学習方法と学習内容の工夫により、生き生きと意欲的に授業に取り組むことができることが改めて理解できた。	○ 連携校において、中・長距離走で学習する内容や用語を統一し共通化を図る。

(ウ) 今後の展望

連携校での大きな行事の一つで「ふれあいマラソン大会」を毎年実施しているが、授業を通して走ることの楽しさや爽快感を体感し、また、他校の生徒を意識して高いモチベーションで大会に臨み、自分なりに精一杯走る生徒が数多く見られたように思う。

また、周防大島町には、今年で第58回という古い歴史を持つ「大島一周駅伝競走大会」が行われているが、中学校の部において、連携校で男子は安下庄中学校が郡内第3位、女子では日良居中学校が郡内第2位、安下庄中学校が郡内第3位と活躍した。今後も自分の体力の向上と健康の維持増進という観点から、将来的にもランニングやウォーキングを継続して楽しんでいけるような生徒の育成をめざしていききたい。

(エ) 実践事例

1 題材名 支え合うことで自己の課題に向かって意欲的に取り組む中距離走

2 題材設定の理由

(1) 生徒観 **我慢強さに欠け、運動に関する経験や能力に個人差が大きい**

本学級の生徒は男子15名女子14名で、明るくパワフルで仲がよく協力しあいながら運動に取り組むことは好きである。しかし、中にはその時の気分で自己中心的な言動を取ったり、苦しいことや地道に継続しておこなう活動をいやがったりする傾向がみられる生徒もいる。

子どもたちの運動離れ、能力の低下が叫ばれて久しいが、本校の3年生においても、小学校から地域のスポーツ少年団などに所属し、幼いときから運動に親しんできた生徒数は非常に少ない。現在、生徒数29人中、運動部に所属している人数が14名(運動部所属率48%)と、運動部に所属している割合も他校と比較して大変低く、日常的に運動していない生徒の多さが伺える。

また、一学期に実施した新体力テストの結果から、日常的に運動に親しんできた生徒と、そうでない生徒との能力差、個人差がとても大きい事が見て取れる。

(2) 教材観 **意欲的に取り組める学習内容が重要**

中距離走は、記録を測定することによって自己の技能を把握できるとともに、他との相対的な能力を容易に知ることのできる個人的なスポーツである。また、長い距離をいかに速く走り通すかに課題があるため、呼吸循環器や筋肉の持久力に大きく影響されるとともに、意志力などの精神的な要素が要求されるという特徴がある。

また、長い距離をある程度の苦痛に耐えて走り通さねばならないこと、技術の構造自体が比較的単純であることなどから、活動自体に喜びや楽しさを見いだしにくく、学習意欲を持続することが非常に難しい種目である。したがって、今日の保健体育の中心的課題といってよい、「運動の特性に触れその喜びや楽しさを味わわせる」という観点から観ると、いかに意欲的に取り組めるような学習内容を仕組むかが重要なポイントとなると思う。

(3) 指導観 **一人ひとりが意欲的に取り組むために、『技術の習得』『自己課題の明確化』『支え合い』**

個人差が大きく、ある程度の苦痛に耐えていく必要のある種目で一人一人が意欲的に活動するためには、自分にあった課題や目標をしっかりと持ち、達成感や成就感をいかに味わわせることができるかだと考える。

そこで、まずは合理的な走り(フォームや呼吸など)の理解と習得に力を注ぎたい。また、練習の主体をペース走にし、ペース走の意義や一定ペースでの疾走の重要性を理解させた上で、練習後の脈拍から運動強度を導きだし、一人ひとりの練習が効果的なものとなるようペース設定を考えさせていきたい。さらに、パートナーのアドバイスでペースを確認させるとともに、励ましや声かけの大切さを体感させながら支え合って課題を克服させ、ランナーとしてもアドバーザーとしても成就感や達成感を感じ、意欲的に取り組むよう支援していきたい。

3 指導目標 (1) 合理的な走りの理解と習得。

(2) ペース走の意義を理解し、運動強度から効果的なペースが設定できる。

(3) 自己に応じた課題が見つげられる。

(4) 的確なアドバイスと支え合いを基盤に、成就感や達成感を味わう。

4 指導計画(総時数 9 時間)

第1次 オリエンテーション……………1時間

第2次 ペース走 …………… 6時間(本時5/6)

第3次 タイムトライアル…………… 1時間

第4次 学習のまとめ …………… 1時間

5 評価計画

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考判断	運動の技能	運動についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・学習規律が守れているか ・授業への参加率 ・学習カードの提出率 ・アドバイザー回数、関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> ・パートナーを支える的確なアドバイス ・自分にふさわしい運動強度(ペース)の設定 ・学習カードへの記入状況 	<ul style="list-style-type: none"> ・フォーム ・いかに自己設定ペースを守れたか ・タイムトライアルでのタイム短縮 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウォーミングアップやクーリングダウンへの取り組み ・期末考査

6 本時案

(1) 題材 陸上競技(中距離走)

(2) 主眼

- ①負担の少ないフォームの大切さを理解し、少しでもそれに近づけることができる。
- ②運動強度から自分の力に応じたタイムを設定し、最後まで一定のペースで走りきるることができる。
- ③的確な方法でランナーにアドバイスできる。

(3) 研究主題に関する指導の工夫

意欲的に取り組むことができる学習内容の構成。

(4) 準備物 学習カード、デジタルタイマー、ゲームベスト

(5) 学習過程

学 習 活 動	教師の手だて
1 準備運動をする。 ・ランニング ・ストレッチ体操	・W-upの意義について理解し、保体部の生徒を中心に主体的に行わせる ※(エ)
2 本時の学習の確認をする。	・長い距離を走るとき負担の少ないフォームや呼吸がとても大切であることを確認させる。 ・運動強度から効果的なペース設定を考えさせる。
3 設定タイムにより第一グループと第二グループに分かれる。	・指示に従い素早くグループ作りを行わせる。
4 第一グループはペース走(男子2000m、女子1400m)を行い、終わりしたいC-dwとして200mジョグを行う。第二グループは記録記入とアドバイスを行う。	・負担の少ないフォームを意識して走るよう支援する。 ※(ウ)(エ) ・目標ペースにあわせて走るために、的確な方法でアドバイスができるよう援助する。(計算が素早く行えない生徒は、教師が手伝いながら行わせる) ※(イ)
5 第二グループはペース走(男子2000m、女子1400m)を行い、終わりしたいC-dwとして200mジョグを行う。第一グループは記録記入とアドバイスを行う。	・C-dwの意義を理解し進んで取り組めたか。 ※(エ) ・自分の力に応じたタイムを設定し、最後まで一定のペースで走りきることができたか。 ※学習カードより(イ)(ウ)
6 本時の反省まとめをする。	・負担の少ないフォームを意識して走ることができたか確認させる。 ・目標ペースにあわせて走ることができたか確認させる。 ・アドバイスはよくわかったか確認させる。 ・次時の授業のための、学習カードへの記入を押さえる。

- (6) 評価 (ア)運動や健康・安全への関心・意欲・態度
(イ)運動や健康・安全についての思考・判断
(ウ)運動の技能
(エ)運動や健康・安全についての知識・理解

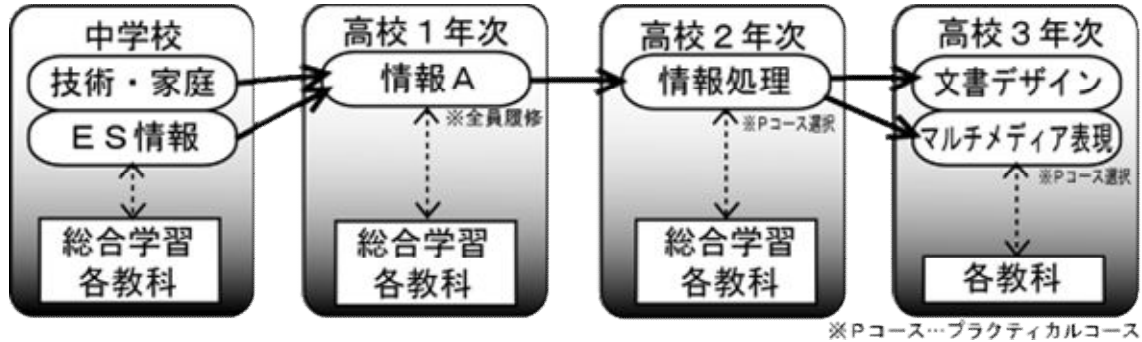
ク 情報科

～ 6年間を見通した「情報教育」における中高教育課程の連携～

(ア) 取組み

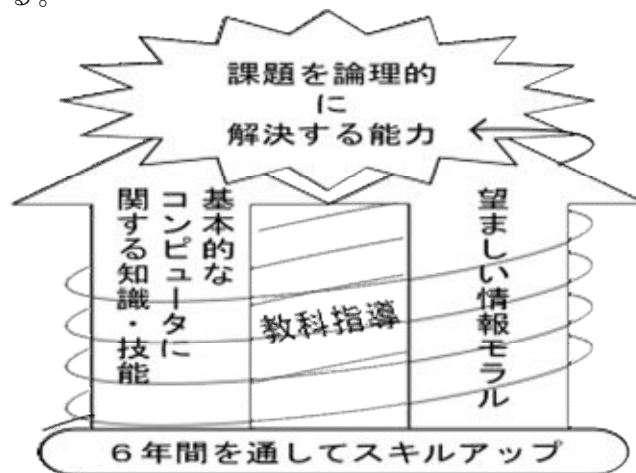
- 中学校と高校の情報教育に関する科目の連携
- 望ましい「情報モラル」の育成
- 基本的なコンピュータに関する知識・技能の習得

下記の表は中学校と高等学校の情報教育に関する科目を示したものである。矢印で科目の連携を示した。全生徒が情報教育を受けるのは高校1年までの4年間である。



< 6年間を通した情報教育の系統図 >

次の図は情報教育を実施していく上で、柱になっていくものを決め、それを図示したものである。2本の矢印の上に生徒に最終的に求める力「課題を論理的に解決する能力」が掲げられている。6年間を通した教科指導の中で「基本的なコンピュータに関する知識・技能」「望ましい情報モラル」を身につけていく中で「課題を論理的に解決する力」を身につけて欲しいというものである。「課題を論理的に解決する力」は目に見える形で現れるものではないが、情報化社会で生き抜くために生徒に身につけて欲しい力である。



< 情報教育の目標の関連図 >

(イ) 成果

よりよい情報教育を行う上で、中学校と高等学校が情報交換を密にすることが必要である。お互いに情報交換をすることによって、指導内容が重複することなく、より効率的な指導ができることが予測される。また、総合学習の成果を発表し合う「郷土おおしま」発表大会で、テーマ学習のプレゼンテーションを中学生と高校生が互いの

作品を目にすることにより情報教育に対する意欲を高める効果も期待できる。さらに、教員同士が指導内容を共有することにより、授業の質が向上するものと思われる。

(ウ) 課題

情報交換が進む中で、中学校が保有するパソコンの台数や、情報教育を実践している技術の時間が非常に限られていること、そしてインターネット回線の通信速度が不足していることなど、ハード面が不足していることも判ってきた。そして中学校間でハード面・ソフト面において異なる実践をしている情報教育をいかに根本的な部分で連携していくかなど課題は山積しているが、これから社会に出ていく生徒にとって、情報教育は必要不可欠なものである。その一方で、近年インターネットを通して、トラブルに巻き込まれる児童が全国的にも増加してきており、どのような取組みができるか、中高教員で一層の連携を図りながら、今後検討していきたい。



平成17年度「郷土おしま」発表大会

(7) 部活動における取組み

ア 取組み

- 中高で共通する部活動における合同練習や練習試合の実施
- 吹奏楽部による中高合同練習及び合同演奏会についてのアンケート実施

平成13年度の中高一貫教育開始以来、バレーボール部や吹奏楽部、ソフトテニス部など、中学校と高校で共通する部活動において、合同練習や練習試合を行い、連携を図ってきた。

今年度は、安下庄中学校と安下庄高校の吹奏楽部が合同で市民演奏会に出演し、演奏会前から安下庄高校で合同練習を頻繁に行った。ともに部員数が減少しており、単独での演奏に支障をきたすことがあるため、この度、合同での出演が検討され、参加することとなった。当日の演奏は、人数が増えたこともあり、満足のいく演奏ができたようである。しかし、当日の演奏会に至るまでには様々な課題もあり、演奏会後に行ったアンケートからも、今後ますます連携を深めていく上で解決すべき問題点が明確になったように思われる。

イ アンケート実施とその結果

- ・対象生徒 … 安下庄中学校 14名（2年生6名、1年生8名）
安下庄高校 8名（2年生4名、1年生4名）

Q 1) 中高合同での練習や演奏会参加についての良い点と悪い点（主な意見）

	良い点	悪い点
中学生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校生がいろいろ教えてくれて、技術が向上する。 ○ 集中できる。 ○ 高校生とふれあえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 移動時間が長く、練習時間が短くなる。 ○ 正門の坂を登るのがつらい。
高校生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 人数が多くなり、合奏などの音が厚くなって、吹いて楽しい。 ○ 良い刺激になる。 ○ 中学生に負けないように頑張れる。 ○ 中学生と仲良くなれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 意識の違いの差が出て、まとまりが悪くなる。 ○ 音を合わせるのが大変。 ○ 移動に時間がかかり、集合時間が合わない。 ○ 練習量が多い。

Q 2) 合同練習や演奏会についての感想（主な意見）

中学生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先輩や先生に楽器の扱い方や改善すべき点を教えてもらえるから、やる気が出た。みんなで合奏すると楽しい。（1年女子） ○ 高校生と中学生の信頼感が高まる。（1年女子） ○ うまくなれたような感じがするのでよかった。（1年女子） ○ 以前よりも部活に対してやる気が出てきた。（2年女子） ○ 移動時間がもったいない。安高生に教えてもらってはいるが、安高生が来たりはしてくれないのかと思う。（2年女子） ○ 練習時間が長い。合奏が終わった後もすぐに終わらない。（2年男子）
高校生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校生だけだと足りないパートとかもいるから、曲も曲らしくなるし、合奏も楽しい。（2年女子） ○ お互いにいい影響を与えられた。（2年女子） ○ 中学生の力は絶大だった。（2年女子） ○ 中学生に教えるのが大変で、自分の練習時間が減った。（2年女子） ○ 合同練習が多すぎて、気まずくて練習しづらい。（1年女子） ○ 中学生の基礎練習不足が目立ち、合奏で足を引っ張る。（2年男子）

Q 3) 今後の改善点について（主な意見）

中学生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 安高の人たちに迷惑をかけない程度に協力していきたい。（2年女子） ○ 音をよくすること。（2年男子） ○ 部活時間を延ばす。（2年女子） ○ 1日練習をするなら土・日のどちらかにして欲しい。（1年女子） ○ 練習が終わったらすぐに終わって欲しい。（2年男子）
高校生	<ul style="list-style-type: none"> ○ 合同での練習は1時間くらいしかないので、合同練習前の個人練習を完全にしておき、パート練習に力を入れるようにする。（2年男子） ○ 日頃から交流を持ち、もっとお互いを知ることによって、全体的なレベルアップにつながる。合奏を定期的に行っていく。（2年女子）

ウ 成果と課題

今まで部活動における連携については、各部が主体的に連絡を取り合って行ってきたが、今年度初めて吹奏楽部においてアンケートを実施した。その結果、部活動における中学生と高校生の意識の違いを把握することができた。

例えば、中学生も高校生も、概ね合同練習について肯定的に受け止めているようである。しかし、中学生は、高校生との合同練習により各自のレベルが上がることに喜びを感じているのに対し、高校生は、中学生が加わることによる演奏レベルの低下と、中学生に対する指導の煩雑さを懸念する生徒が多いようである。そのため、今後の改善点についての高校生は、連携を深めることで個人の演奏技術を互いに高めていくとともに、全体の合奏において満足いく音づくりをめざそうとする意見が多くみられた。一方、中学生には練習の時間や環境についての意見が多く見られ、ここでも中学生と高校生の意識の違いがはっきりと見られた。

これらのアンケート結果を受けて、中高の吹奏楽部の顧問がどのようなことに気をつけて合同練習を行い、また、生徒がどのようなことに期待しているのかを十分に協議し、アンケートで明らかにされた課題を少しでも解決するよう配慮しながら、連携を深めていく必要があると思われる。

4 今後の展望

- 学力充実システムにおける様々な取組みの再検証の継続
 - ・ 「教科別診断表」により蓄積されたデータの活用方法の研究
 - ・ 交流授業における共通理解事項の徹底
 - ・ 「安下庄高校が求める5教科の力」の活用範囲の拡大
- 体験的な学習を重視した学校行事の改善と充実
 - ・ 6年間を見通した「ボランティア活動」の支援体制の充実
 - ・ 中高合同による学校行事の協力体制の発展と強化
- 6年間を見通したテーマ学習の工夫・改善
 - ・ 郷土出身の民俗学者「宮本常一」の研究手法であるフィールドワークを取り入れた調査・研究の充実
- 小中高連携を視野に入れた取組みの模索

本年度は中高の5教科の教員を中心に作成した「安下庄高校が求める5教科の力」の改訂作業を行い、昨年末に連携3中学校の中学2・3年生に配布した。このガイドライン作成に当たっては、中高の教員で十分な協議を重ねており、中学校側・高校側双方の教科指導に対する思いや、安下庄高校が求める中学生像のより具体的なイメージが明らかになった。本年度の当初から各教科が中心となり、中学生が自主学習しやすいように、中学校教員の意見を参考にして改訂作業を進めてきた。今後は、このガイドラインをいかに日頃の授業の中に位置づけ、年間を通して計画的に活用していくかを模索していく必要がある。中学校の日々の授業や単元別テストにおいて、あるいは2年次・3年次の最終段階における総復習の参考として、更には「簡便な入試」の面接での活用など、様々な場面での活用方法を十分に検討していく必要がある。

また、現在は国語・数学・音楽・英語を中心に、週時程表に位置づけて相互交流授業を実施している。交流授業の時数は2時間程度が望ましいと思われるが、各教科の教員定数や所属する学校の授業時数から、1時間で交流授業を行わざるを得ない教科が多い。その場合の交流授業のあり方やT・Tの形態などについても、改めて中高教員で協議し共通理解を深めていく必要がある。今後も交流授業について活発な協議を行い、全中高教員が日頃の授業の質の向上に努め、生徒に分かりやすい授業にするように工夫・改善をしていかなければならない。

学力充実システムの柱の一つにもなっている、定期テストの共通化による生徒の到達度の確認および分析については、教科別診断表を年2回作成し、中学校1年生から高校1年生までの生徒一人ひとりの到達度を継続的にデータ集計してきた。しかし、診断表に表れる数字からでは、授業へのフィードバックにつながる分析がしにくい、という声が上がってきていた。そこで、定期テストの他に、中学校で実施している定着確認テストでも観点別の集計を行い、定期テストと同様に各校で分析することも検討している。これにより、従来の定期テストのみによる生徒個人の到達度の確認が、この定着確認テストでも行えることになり、生徒の成績の推移をより細かなスパンで確認することができる。また、従来の定期テストによる共通化で得られたデータは、主に教員側の指導にフィードバックすることを目的とし、定着確認テストでのデータは、生徒に個人票として提示し、生徒自身の学習状況の見直しに活用することを目的とすることも現在検討中である。教員のみならず、

生徒へのフィードバックも含めて、今までの学力充実システムの再検証がこれからの重要な検討事項となってくると思われる。

中高合同の学校行事については、中高一貫教育開始当時より継続して行っていくことで、中高教員の連携も深まり、年間計画における合同行事の位置づけも明確化してきたように思われる。また、昨年度からは、みかん収穫作業においては中高間で役割を明確に分担し、地域の農家募集は中学校担当者に一任している。今年度も引き続き役割分担の明確化を念頭に行事を進め、成果を上げている。今後は他の行事においても中高間で役割分担して行えるものは積極的に分担をし、中高それぞれの立場から学校行事を見つめ直して改善策を講じていく必要があると思われる。

また、一昨年度から新たに開始した「ボランティア活動」については、各地域の身近なボランティアに目を向けながら、中高間あるいは中中間で連絡を取りながら、共同で行えるものについては積極的に合同実施をすることを学校間で共通理解している。今年度は、各校でのボランティア活動への参加状況が少しずつではあるが、積極的に取り組んでいるように思われる。今後も学校間の連絡を更に緊密に取りながら活動に取り組み、中高教員による6年間の支援体制を築き上げ、本地域の中学生・高校生がボランティア精神にあふれ、さらには郷土を愛する心を育てられるようにしていきたい。

さらに、安下庄小学校・和田小学校との連携を今後も深めていく必要がある。現在、東和中学校では和田小学校との合同行事として、海岸清掃活動を行っている。これは以前は、中高合同行事である「ふれあいクリーン作戦」を行っていたときに、東和地区については和田小学校とも共同で行っていた経緯がある。「ふれあいクリーン作戦」は発展的解消をしたが、東和中学校はその後引き続き和田小学校との合同行事として継続実施している。今後どのように小中高の連携を具現化していくのかが、大きな課題となってくる。この小中高の連携が軌道に乗り有効に機能しだして初めて、本地域の児童・生徒が12年間という長いスパンの中で、地域に支えられ、子どもたちが互いに刺激し合いながら、学力のみならずたくましい心の育成も身につけることが可能になると思われる。

おわりに

本地域で中高一貫教育開始して5年が経過した。これまでは開始当初に策定したシステムや交流授業等の目的を達成するように中高教員が一丸となって取り組んできた。その中で中学校・高校のそれぞれの実情や生徒に対する思い、さらに教育制度上の相違による見解の違いなど、様々な困難に直面してきた。例えば、一昨年度には中高合同での学校行事を見直すべきとの声が高まり、教務主任会議や小委員会などで検討した結果、各行事とも地域とのつながりや生徒同士のつながりがあり、有意義であるという結論に達し、現在に至っている。また、本年度は本地域の生徒の学力を向上させる学力充実システムについても中高教員による活発な協議が行われ、定期テストの共通化やデータの活用方法など、来年度の方向性も見えてきた。このように、諸問題を一つ一つを解決するよう努力してきたことで、中高間の相互理解も広がり、様々な取組みに対する共通理解も格段に進んできたように思われる。

しかし、開始当時では思いもつかなかった課題や問題点が見られ出し、新たな視点で中高一貫教育を考えていく必要が出てきている。現在、周防大島町の中学校における統廃合問題が上っており、現在連携している3中学校の枠組みが変わる可能性が大である。また、平成19年度から21年度の間に行われることになった、周防大島町内にある久賀高校（福祉科1クラス、普通科1クラス）と安下庄高校との統廃合問題など、中高それぞれにおいて大きな変革が求められている。今までの4校間での問題としてだけではなく、広く新しい視野に立って、今後の中高一貫教育の在り方を考えていく必要に迫られている。

どのような方向に進むのかは未知の部分が多いが、これまでの中高一貫教育における取組みで得た成果を来年度も確実に実現していき、また今年度の課題に挙げた問題点を中高教員の十分な協議によって解決するよう、積極的に取り組むことが急務である。新たな取組みやこれまでの成果をさらに充実させていくためにも、教員配置や教育課程上の配慮など、関係各方面からの条件整備を強く要望したい。

参考資料

I 橘・東和地域中高一貫教育 教育課程（平成14年度～平成17年度）

◎移行期（H14年度）

○中学校部分（新学習指導要領）

学年	100	200	300	400	500	600	700	800	900	980				
1年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS	総合的な学習の時間	道徳 特別活動		
2年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS	SS		ES	総合的な学習の時間
3年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技術・家庭	外国語	BS1	BS2		SS	ES

○高等学校部分（旧学習指導要領）

学年・類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年 共通	国語I		政経		数学I・A			化学IB			英語I			OCA		生活一般		保健		体育		音楽I		美術I		書道I							
2年	I型	現代文		古典I		世史A		生物IB			英語II			生活一般		保健		体育		日史B		数学II		米語会話		音楽II		美術II		書道II		総合的な学習の時間 ホームルーム活動	
	IIa型	現代文		古典I		世史B		数学II			数学B		生物IB		米文化理解		英語II		生活一般		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		書道II		
	IIb型	現代文		古典I		世史A		数学II			数学B		英語II			生活一般		保健		体育		日史A		物理IB		音楽II		美術II		書道II			
3年	I型	現代文		生物IB		ライティング		リーディング			文書処理		RS		体育		日史B		地理B		古典II		OCB		音楽II		美術II		世史B				
	IIa型	現代文		古典II		世史B		数学II			生物IB		ライティング			リーディング		体育		日史B		数学B		音楽II		美術II		書道II					
	IIb型	現代文		古典II		数学III			数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		体育		日史B		物理II		音楽II		美術II		書道II				

◎移行期（H15年度）

○高等学校部分（第1学年：新学習指導要領，第2・第3学年：旧学習指導要領）

※中学校部分は、平成14年度と同一

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
1年 共通	国語総合		現社		数学I			数学A			理科総合A		英語I			OCI		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽I		美術I		書道I				
2年	ブラクティカル	現代文		古典I		世史A		生物IB			英語II			OCB		生活一般		保健		体育		日史B		音楽II		数学II		米語会話		美術II		書道II		総合的な学習の時間 ホームルーム活動
	アカデミックa	現代文		古典I		世史B		数学II			数学B		生物IB		OCB		英語II		生活一般		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		書道II			
	アカデミックb	現代文		古典I		世史A		数学II			数学B		英語II			生活一般		保健		体育		日史A		物理IB		音楽II		美術II		書道II				
3年	I型	現代文		政経		生物IB		ライティング			リーディング			文書処理		RS		体育		日史B		古典II		数学I		OCB		音楽II		美術II		世史B		
	IIa型	現代文		古典II		世史B		政経			数学II			生物IB		ライティング			リーディング		体育		日史B		数学B		音楽II		美術II		書道II			
	IIb型	現代文		古典II		政経			数学III			数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		体育		日史B		物理II		音楽II		美術II		書道II		

◎移行期（H16年度）

○高等学校部分（第1・2学年：新学習指導要領，第3学年：旧学習指導要領）

※中学校部分は、平成14年度のものと同じ

学年・コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年 共通	国語総合		現社		数学I		数学A		理科総合A		英語I		O C I		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽I		美術I		書道I		総合的な学習の時間 ホームルーム活動			
2年	ブラクティカル	現代文		古典		世史A		生物I		英語II		O C II		情報処理		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		書道II		食文化		数学II ビジネス基礎 服飾文化 リハビリテーション 英語II 素描I 音楽理論		
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		生物I		米語会話		英語II		保健		体育		日史B		美術II		書道II		食文化		日史B 地理B		
	アカデミック 理科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		化学I		英語II		保健		体育		日史B		地理B		美術II		書道II		食文化		物理I 生物I		
3年	ブラクティカル	現代文		倫理		生物I B		ライティング		リーディング		文書処理		R S		体育		日史B		古典II		数学II		O C C		世界史A		総合的な学習の時間 ホームルーム活動				
	アカデミック a	現代文		古典II		世史B		倫理		数学II		生物I B		ライティング		リーディング		日史B		情報処理		数学II		簿記		食物				簿記		
	アカデミック b	現代文		古典II		倫理		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史B		情報処理		簿記		食物				簿記		
ブラクティカル	現代文		倫理		生物I B		ライティング		リーディング		文書処理		R S		体育		日史B		古典II		数学II		O C C		世界史A		総合的な学習の時間 ホームルーム活動					
アカデミック a	現代文		古典II		世史B		倫理		数学II		生物I B		ライティング		リーディング		日史B		情報処理		数学II		簿記		食物					簿記		
アカデミック b	現代文		古典II		倫理		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史B		情報処理		簿記		食物					簿記		

◎完全実施期（H17年度）

○高等学校部分（新学習指導要領完全実施）

※中学校部分は、平成14年度のものと同じ

学年・コース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
1年 共通	国語総合		現社		数学I		数学A		理科総合A		英語I		O C I		家庭基礎		情報A		保健		体育		音楽I		美術I		書道I		総合的な学習の時間 ホームルーム活動			
2年	ブラクティカル	現代文		古典		世史A		生物I		英語II		O C II		情報処理		保健		体育		日史B		音楽II		美術II		書道II		食文化		数学II ビジネス基礎 服飾文化 リハビリテーション 英語II 素描I 音楽理論		
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		生物I		米語会話		英語II		保健		体育		日史B		美術II		書道II		食文化		日史B 地理B		
	アカデミック 理科	現代文		古典		世史B		数学II		数学B		化学I		英語II		保健		体育		日史B		地理B		美術II		書道II		食文化		物理I 生物I		
3年	ブラクティカル	現代文		化学I		リーディング		O C II		フードデザイン		体育		日史B		数学II		古典		ライティング		簿記		マーケティング		文書デザイン		マルチメディア表現		総合的な学習の時間 ホームルーム活動		
	アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		化学I		生物II		ライティング		リーディング		体育		日史B		世史A		簿記		構成		家庭看護福祉		服飾手芸			簿記	
	アカデミック 理科	現代文		古典		政経		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史B		政経		素描II		音楽III		演奏法			簿記	
ブラクティカル	現代文		化学I		リーディング		O C II		フードデザイン		体育		日史B		数学II		古典		ライティング		簿記		マーケティング		文書デザイン		マルチメディア表現				総合的な学習の時間 ホームルーム活動	
アカデミック 文科	現代文		古典		世史B		化学I		生物II		ライティング		リーディング		体育		日史B		世史A		簿記		構成		家庭看護福祉		服飾手芸					簿記
アカデミック 理科	現代文		古典		政経		数学III		数学C		数学B		化学II		ライティング		リーディング		日史B		政経		素描II		音楽III		演奏法					簿記

注

◎移行期（H14年度）教育課程について

○中学校部分

- ・BSは、「ベーシックスタディ」、SSは、「スキルスタディ」、ESは、「エクスプレッションスタディ」の略

○高等学校部分

- ・「米語会話」「米文化理解」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

◎移行期（H15年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

◎移行期（H16年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「レクリエーションスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

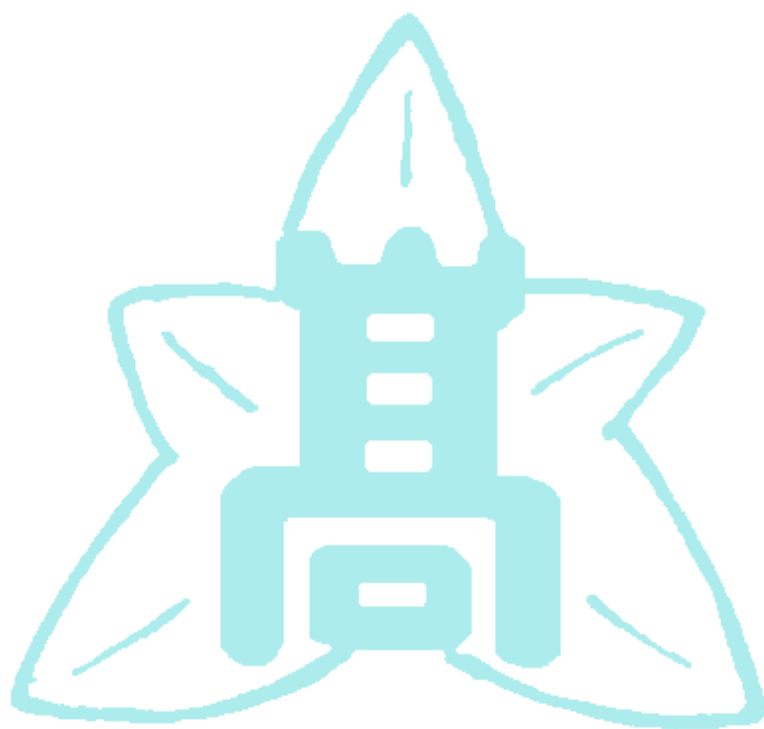
◎完全実施期（H17年度）教育課程について

○高等学校部分

- ・「米語会話」「米文化理解」「レクリエーションスポーツ」「ウィンド&マリンスポーツ」は、学校設定科目
- ・OCは、「オーラル・コミュニケーション」の略

安下庄高校が求める 5教科の力

2005



山口県立安下庄高等学校

○ 連携中学校の中学生のみなさんへ

安下庄中学校、日良居中学校、東和中学校の中学2・3年生のみなさん、日頃からしっかり勉強に取り組んでいますか。

さて、3年生のみなさんはもうすぐ高校に入学して、新たな学校生活をスタートさせるわけですが、安下庄高校に入学する時には、他の高校とは違って学力検査（いわゆる高校入試）がありません。しかし、「高校入試がないから、勉強しなくても大丈夫. . . 」とっていては、高校に入学した後で大変困ってしまうことになります。言うまでもなく、高校の学習は、中学校での学習の上に成り立っているのです。

そこで、みなさんの中学3年間の勉強を振り返ってもらうために、安下庄高校はこの「安下庄高校が求める5教科の力」を作成しました。

○ 「安下庄高校が求める5教科の力」とは？

これは国語、社会、数学、理科、英語の5教科について、今まで学んだことをどれだけ頭に整理できているかをチェックするためのものです。ここに挙げている項目は、安下庄高校の各教科の先生が「ここはしっかり身につけておいたほうがいいよ！」と思っているものばかりです。じっくりと丁寧に読み進め、「これはできる、分かる！」と思う項目には、チェック欄に を記入していきましょう。もし理解していなかったり、思い出せない項目があったりしたら、教科書を読み直して、もう一度自分で整理しておきましょう。この冊子で、中学3年間で学習してきた内容をチェックし完璧にしておけば、高校に入学してからの学習も大丈夫！さあ、どの教科から始めても構いません。安下庄高校での勉強に向けて、第一歩を踏み出しましょう！

安下庄高校が求める国語の力

1 話すこと・聞くこと

- 自分の考えや気持ちを相手の理解が得られるように話す。
- 話の内容を相手の意図を考えながら聞き取る。
- 話題や話し合いの方向をとらえて的確に話す。
- 相手の立場や考え方を尊重し、話し合いがより深まっていくように話す。
- 他人の意見と自分の意見とを比べ、自分の考えを深める。

2 書くこと

- 自分の立場及び伝えたい事柄を明確にして、説得力のある文章にすることができる。
- 自分の意見が明確に伝わるように、論理の展開を工夫して書くことができる。
- 書いた文章を互いに読み合い、自分の考えを深め、表現に役立てることができる。
- 原稿用紙の使い方を理解し、それをふまえて文章を書くことができる。
 - 1 各段落の書き出しは、一字下げる。
 - 2 句読点（ 。 と 、 ）や他の符号を適切に用いる。
【符号】 ・中点 () カッコ 「 」かぎカッコ ～波形
 =つなぎ ーつなぎ線 …点線 ——ダッシュ
 - 3 場面や題材や観点が変化するときは、段落を立てる。
 - 4 文末（常体・敬体）を統一する。
 - 5 縦書きの場合は、漢数字を用いる。
 - 6 句読点や閉じかぎ（ 」 ）は行の初めに書かずに、前の行の一番最後の文字と同じマスに入れる。

3 読むこと

〈現代文〉

- 文章中の語句の意味や働きを理解し、文章の展開に即して内容をとらえ理解することができる。
- 文章に表現されているものの見方や考え方を理解し、自分の考えを広げることができる。
- 筆者の論理の展開をとらえて内容を理解し、それに対する自分の意見を持つことができる。
- 表現された人物の状況や心情を読みとり、文章全体を味わうことができる。
- 興味や関心、目的や意図に応じて、すすんで読書していくことができる。

〈古典〉

- 歴史的仮名遣いを含め、古文を正しく音読することができる。
 - 1 語音以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と読む。
例 すまひ→すまい いへ→いえ
 - 2 「ゐ」は「イ」、「ゑ」は「エ」と読む。
例 居る→いる 射る→いる 衛士→えじ
- 古語と現代語との意味や働きの違いに気づくことができる。
例 やがて → ①すぐに ②そのまま
おどろく → 目を覚ます
うつくし → かわいい、いとしい
- 訓点（送りがなと返り点〈レ点・一二点〉）の働きを理解し、漢文を正しく音読することができる。
- 漢文と日本語との基本構造の違いに気づくことができる。
- 文章に表現された内容を読みとり、興味関心を抱くことができる。

【言語事項】

- 常用漢字1945字のうち、「1300字程度」（漢字検定4級合格程度）以上を理解し、文章の中で適切に使うことができる。
 - 1 音読みと訓読みとを見分ける。
 - 2 漢和辞典で意味や働きを調べる。
- 文の成分や組み立てに関心を持ち、現代語の動詞の活用を理解することができる。
 - 1 文の成分を理解する。
【働き】 主語・述語 修飾語 独立語 接続語
 - 2 用言の活用を理解する。
【動詞】 活用の種類（ 五段活用 上一段活用 下一段活用 変格活用（力行・サ行） ）
活用形（ 未然形 連用形 終止形 連体形 仮定形 命令形 ）
【形容詞・形容動詞】
活用形（ 未然形 連用形 終止形 連体形 仮定形 命令形 ）
- 共通語と方言の果たす役割を理解するとともに、敬語を適切に使うことができる。
【敬語】 丁寧語 尊敬語 謙讓語

安下庄高校が求める社会（地理的分野）の力

1 世界のすがた

- 地球儀・地図にある経線・緯線はどのような基準で引かれているかがわかる。
- 地図帳を使って様々な国・都市の位置を調べることができる。
- 日本と色々な国との時差を調べることができる。
- 世界の6つの州（アフリカ・ヨーロッパ・アジア・オセアニア・北アメリカ・南アメリカ）のそれぞれの州が世界地図の中でどの地域かがわかる。
- 世界の略地図を描くことができる。

2 日本のすがた

- 日本の位置を地球儀や地図帳で示すことができる。
- 日本の略地図を描くことができる。
- 日本の全ての都道府県とそれぞれの都道府県庁所在地がわかる。

3 身近な地域の調査

- 地形図の見方を理解して、地形図から身近な地域の特色を読みとることができる。
- 統計などの資料をもとにして身近な地域の特色について調べることができる。

4 都道府県の調査

- ある都道府県を選んで、その都道府県の地形の特色を地図帳で調べることができる。
- 選んだ都道府県の産業の特色を統計資料で調べることができる。
- 選んだ都道府県と他の地域との関係について色々な資料を使って考えることができる。

5 世界の国々の調査

- アメリカ合衆国の位置を地図帳で示すことができる。
- アメリカ合衆国の地形・気候区分を地図帳で調べることができる。
- アメリカ合衆国の民族や文化にはどのような特色があるかがわかる。
- アメリカ合衆国の資源と産業が、世界にどのような影響を与えているかがわかる。
- マレーシアの位置を地図帳で示すことができる。
- マレーシアに色々な民族が住んでいる理由を歴史の面から説明できる。
- マレーシアの産業の特色と変化がわかる。
- アセアン（ASEAN）に加盟している国とその位置を地図帳で示すことができる。
- フランスの位置を地図帳で示すことができる。
- フランスの産業の特色がわかる。
- 日本に伝わってきたフランスの文化にどのようなものがあるかがわかる。
- ヨーロッパ連合（EU）に加盟している国とその位置を地図帳で示すことができる。
- フランスとヨーロッパの国々との結びつきについて説明できる。

6 世界から見た日本

- 日本のおもな山脈・河川・平地について地図帳で示すことができる。
- 日本の気候区分とその雨温図が示す特徴がわかる。
- どのような地域に人口が集中しているか、反対に過疎化が進んでいるかがわかる。

- 人口ピラミッドの読み方がわかり、どのような型に分類できるかがわかる。
- 高齢社会がかかえる問題について考えることができる。
- 石油・石炭・鉄鉱石の産出国を挙げその位置を地図帳で示すことができる。
- 日本のおもな工業地帯・地域（北陸・北関東・京浜・京葉・東海・中京・阪神・瀬戸内・北九州）の位置と中心となる工業分野がわかる。

安下庄高校が求める社会（歴史的分野）の力

1 全体をととして

- おおまかな時代区分である「原始・古代・中世・近世・近代・現代」がわかる。
- 日本の時代区分である「旧石器・縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山・江戸・明治・大正・昭和」がわかる。
- 西暦と年号の違い、世紀の数え方を説明することができる（「1945年は20世紀」など）。
- 教科書の本文にでてくる地名・国名が、地図上でどこにあるかを示すことができる。
- 東アジアとの関わりから山口県の位置を説明することができる（東京よりもソウルが近いことなど）。
- さくいんの人名のおおよそについては、どの時代で何をした人を説明することができる。
- 教科書にでてくる写真・絵画などから、その時代の様子や変化を考えることができる。

2 歴史の流れと地域の歴史

- 興味をもったテーマについて、歴史のなかでどのように移り変わったかを調べることができる。
- 博物館や資料館で、自分の地域にどんな歴史があったのかを調べることができる。

3 古代までの日本

- 旧石器時代の人類は、どのように進化していったか、また、そのころの日本列島の様子はどうだったかを推測することができる。
- 世界各地で、文明がどのように発達していったかがわかる。
- 縄文文化と弥生文化の違いを示すことができる。
- 弥生時代、日本列島にあった国ぐにが、中国とどのようにつきあっていたかを資料から読み取ることができる。
- 中国に隋、唐とつづいてできた律令国家から、日本がどのような影響を受けたかを理解することができる。

4 中世の日本

- 平氏や源氏が、貴族にかわって政権をとっていく流れを大まかにつかむことができる。
- 日本に襲来してきたモンゴル民族が、どのように勢力を拡大していったかを推測することができる。
- 「倭寇」と呼ばれていた人々が、どこでどのような活動をしていたかを資料から読み取ることができる。
- 15世紀ごろ、中国・朝鮮・日本・琉球が、どのような関係・交流をもっていたかを考えることができる。
- 大内氏や毛利氏のような戦国大名が、どのように地方を支配し、発展させたかを考えることができる。

5 近世の日本

- 織田信長・豊臣秀吉・徳川家康による天下統一への流れをつかむことができる。
- ヨーロッパの国ぐにが日本に貿易・布教にやってきた背景にあった大きな変動は、どのようなものだったかを考えることができる。
- 200年以上もつづいた江戸幕府の政治について考えを深めることができる。
- 江戸幕府が鎖国をした理由を考えることができる。
- 江戸幕府が改革を進めた理由を考えることができる。

6 近現代の日本と世界

- イギリス・フランス・北アメリカでは、市民が政治の主役になっていく流れを大まかにつかむことができる。
- 欧米諸国が日本に開国を求めたり、アジア・アフリカを植民地にしていった背景にある産業や経済の変化について説明することができる。
- 江戸幕府が倒れたあと、新しい政府が進めた近代化の内容を大まかに説明することができる。
- 近代化に成功した日本が中国（清、中華民国）・朝鮮に圧迫を加えていった流れをつかむことができる。
- 第一次世界大戦へとつながった、ヨーロッパ諸国の対立を説明できる。
- 第一次世界大戦のあと、アメリカ合衆国とソビエト社会主義共和国連邦が大国として発展していった流れがわかる。
- 世界恐慌による混乱に、各国はどのように対応していったかをつかむことができる。
- 日本は、なぜ東アジアに進出し、大きな犠牲が起こるまで戦争を止められなかったのか、その理由を考えることができる。
- 敗戦後の日本は、どのように民主化がすすめられ、復興していったかがわかる。
- 戦後の「冷たい戦争」とはどのようなものか、大まかに説明することができる。
- 現在の国際社会がかかえる問題について考えることができる。

安下庄高校が求める社会（公民的分野）の力

1 全体をとおして

- 現代の社会のあらゆる出来事に対する関心をもっている。
- 様々な資料や情報の中から、必要な資料、情報を適切に収集し、選択して事実を正確にとらえて公正に判断することができる。

2 現代社会と私たちの生活

- 現代社会を様々な視点からとらえ、その特色を身近な生活から考えることができる。
- 国際社会におけるわが国の役割について、考えることができる。（政治面、経済面、その他）
- 高度経済成長期以後のわが国や国際社会の変容について流れがわかる。
- 家族や地域社会などの機能から、個人と社会の関わりについて考えることができる。

3 国民生活と経済

- 身近な消費生活から市場経済のしくみを理解している。（需要と供給の関係、価格が変動するしくみなど）
- 銀行を中心とした金融のしくみを理解している。（銀行の仕事、金融のしくみなど）
- 国民経済の中で、政府や地方公共団体が果たしている役割を理解できる。
- 各種カードの違いが説明できる。（プリペイドカード、クレジットカードなど）
- 勤労の権利と義務、労働組合の役割や労働基準法の内容などを説明できる。
- 働くことの意義と役割、雇用と労働条件の改善の問題について考えることができる。
- 財政の役割から、租税の意義や納税の義務の重要性について考えることができる。（租税の種類、租税の使われ方、国債についてなど）

4 現代の民主政治とこれからの社会

- 人間の尊重についての考え方を基本的人権を中心に考えることができる。（自由権、社会権、参政権、新しい人権の問題等）
- 民主政治の意義を考えるとともに、民主政治における法の意義について理解できる。
- 日本国憲法における基本的原則を理解し、天皇の位置づけについても理解できる。
- 国政及び地方自治の仕組みを理解し、住民の権利や義務について住民としての意識をもてる。
- 社会事象に対する自分の意見を持つことができる。
- 世界平和を確立するためには、国家間の相互による主権の尊重と協力と各国民の相互理解と協力が重要であることを認識している。
- 国際連合のしくみと働きについて、理解している。
- 現代社会の抱える様々な課題について、その背景や原因、現状を理解している。（資源・エネルギー問題、地球環境問題、人口食料問題、国際平和への問題等）
- よりよい社会を築いていくために、解決すべき課題について、自分との関わりの中で考えることができる。

安下庄高校が求める数学の力

数学の学力向上には次の3つの力を養うようにします。

- 解答への道筋を考える能力
- 多様な課題に対する問題解決能力
- 規則性や一般性を発見する力

これらを養うためには、

- 方程式や関数、図形について、その性質を理解し、多くの知識を持ちましょう。
- 多くの問題演習を行い、計算力を向上させましょう。
- 式や文章から、そのグラフや図形を作図を試みましょう。また逆に、図やグラフからそれを表す式や文章を考える練習をしましょう。

数学の学力は時間をかけて反復練習すれば必ず身につきます。以下に中学で習熟すべき項目を挙げますので、各項目に自信を持って「はい」と答えられるように、学習を進めてください。

1 数と式

- 正の数と負の数を使って四則計算ができる。 1年
 $5 - 2 \times (-3) = ?$
- 数の平方根の意味が理解でき、平方根を含む式の計算ができる。 3年
3の平方根は？ $\sqrt{8} - \sqrt{2} = ?$
- 数量を文字を用いて式に表現できる。 1年
半径 r の半円の面積は？
- 文字を用いた式の四則計算ができる。 2年
- 一次式の積が計算ができ、式の展開や因数分解ができる。 3年
 $(3a + 2b)(2a - b) = ?$ $x^2 - y^2 = ?$
- 必要に応じて、等式を変形できる。 1年
 $V = \pi r^2 h$ のとき $h = ?$
- 一次方程式・連立方程式・二次方程式を解くことができる。 1・2・3年

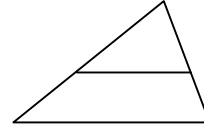
2 図形領域

《平面図形》

- 三角形の合同条件（3種）を利用して証明問題が解ける。 2年

平行四辺形の対角線はそれぞれの中点で交わる・・・証明しよう！

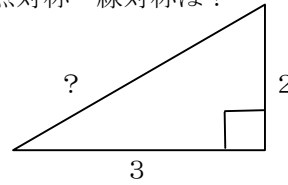
- 円周角と中心角の関係を知っている。 2年
- 三角形の相似条件（3種）を知っている。 3年
- 平行線と線分の比についての性質を使った問題が解ける。 3年



- 基本的な図形（角の二等分線、線分の垂直二等分線、垂線など）が作図できる。 1年
- 線対称、点対称の意味を説明できる。 1年

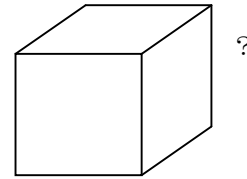
正三角形 正方形 平行四辺形・・・ 点対称・線対称は？

- 三平方の定理を利用して問題が解ける。 3年



《空間図形》

- 空間における直線や平面の位置関係がわかる。 1年
- 空間図形を直線や平面図形の運動によってできたものと考えられる。 1年
- 立方体・円錐など基本的な立体の表面積・体積が求められる。 1年



3 数量関係

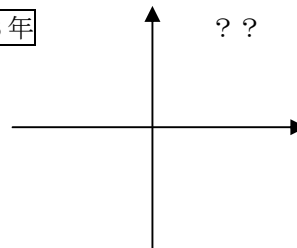
- 比例、反比例のグラフをかくことができる。 1年
- 一次関数のグラフをかくことができる。 2年

$y = 3x$ のグラフを y 軸にそって3だけ平行移動すると $y = ?$

- 起こりうる場合の整理をし、樹形図などを利用して数えることができる。 2年
- 簡単な確率を求めることができる。 2年

2つのさいころ振って目の和が9以上の確率は？

- 関数 $y = ax^2$ のグラフがかける。 3年
- 関数のとる値の変化の割合を求めることができる。 2・3年



安下庄高校が求める理科の力

1 全体をとおして

- 進んで身の回りの自然を調べることができる。
- 自然現象をさまざまな視点からとらえることができる。
- 科学的なものの見方や考え方ができる。
- 観察や実験から規則性・法則性を見いだすことができる。

2 化学分野

- 物質を、化学式を使って表すことができる。
 - (1) 次の物質を、化学式で表しましょう。
 - ア 水 () イ 二酸化炭素 ()
 - ウ 酸素 () エ 水素 ()

- 物質の構成単位としての原子・分子のつくりについて理解できる。
 - (1) 物質のもとになり、それ以上分けることのできない粒を () という。
 - (2) 水や塩化銅などのように、別の物質に分解できる物質を () という。
 - (3) 水素や酸素、銅や銀などのように、別の物質に分解できない物質を () という。
 - (4) 物質がその性質を示す最小単位を(ア)といい、これは、いくつかの(イ)が結びついてできている。物質には、金属や炭素、塩化ナトリウムのように(ア)をつくらないものもあり、その場合は、その物質を構成する(イ)の比で物質を表す。

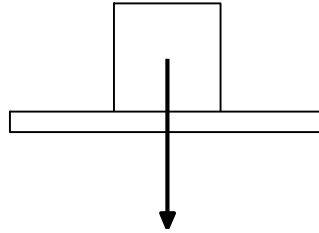
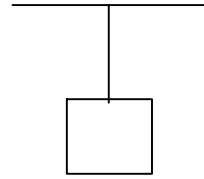
- 高校で物質の量を学習するにあたり、比例の計算や濃度の計算を解くことができる。
 - (1) 鉛筆は12本で1ダースです。では36本は何ダースですか？ ()
また、0.5ダースは何本ですか？ ()
 - (2) 100gの食塩水の中に10gの食塩が含まれているとすると、これは何%の水溶液ですか。
()
 - (3) 100gの水に25gの食塩を溶かしたときの濃度は何%になりますか。
()

- 化学の基本的な原理・法則を知る。
 - (1) 2種類以上の物質が結びついて性質の違う別の物質ができる化学変化を何といいますか。
()
 - (2) 物質どうしが結びつくとき、質量の比は () である。
 - (3) 物質が2種類以上の物質に分かれる化学変化を何といいますか。()
 - (4) (1) で答えた化学変化のうち、物質が酸素と結びつく変化を特に何とよんでいますか。
()
 - (5) (2) で答えた化学変化のうち、物質が酸素を失う変化を特に何とよんでいますか。
()
 - (6) いっぱんに、化学変化の前後で、その変化に関係している物質全体の質量は変わらない。
これを何の法則といいますか。()

2 物理分野

□ 力

- (1) 質量の単位は () や () を使う。
- (2) 力の大きさを表す単位はNとかいて () と読む。
- (3) 1 k g の物体にはたらく重力は約 () Nである。
※注意! 高校の理科では、1 k g の物体に働く重力を9.8Nとする。
- (4) 天井につり下げられた5 k g の物体にはたらく重力を、矢印を使って表せ。但し、10Nを1cmとする。
- (5) 2つの力がつりあう条件を答えよ。
2つの力が () 上にある。
2つの力の () が逆である。
2つの力の () が等しい。
- (6) 机の上に置かれた物体にはたらく重力とつりあう力 (物体を支える力) を図に記入せよ。



□ 運動とエネルギー

- (1) 運動している物体に力がはたらいっていないとき、物体は () 運動をする。
- (2) 台車を斜面に沿って運動させると、その速さは次第に () なる。
- (3) 斜面が急なほど、速さの増え方は () なる。
- (4) 運動している物体が持っているエネルギーのことを () と呼ぶ。このエネルギーは物体が () 運動しているほど、また、質量が () ほど大きくなる。
- (5) 高いところにある物体が持っているエネルギーを () と呼ぶ。このエネルギーは、物体の質量が () ほど、高さが () ほど大きくなる。
- (6) ふりこが振れ続けるのは、() エネルギーと () エネルギーが互いに移り変わっているからである。
- (7) 運動エネルギーと位置エネルギーをあわせて () エネルギーと呼ぶ。
- (8) (7) のエネルギーが一定であることを () の法則と呼ぶ。
- (9) 電流と電圧と抵抗の関係を式で表せ。 ()
- (10) 電力を式で表せ。 電力 (W) = () × ()
- (11) 1 Wの電力で1秒間電流を流したときに発生する熱量が1 () である。

3 生物分野

- 植物のくらしとなかま
- (1) 呼吸を吹き込んで黄色にしたBTB溶液のはいつて試験管にオオカナダモを入れ光を当てた。BTB溶液はどのように変化したか。またその理由はなぜか。
- (2) おしべのやくでつくられた()が、めしべの柱頭につくと、やがて子房は果実に、()は種子になる。エンドウのように種子をつくってなかまをふやす植物を()植物という。
- 動物のくらしとなかま
- (1) 心臓からからだの各部に向かう血流が流れる血管を()といい、からだの各部から心臓へ向かう血流が流れる血管を()という。この血流の中で酸素を運ぶ血液中の成分は()である。
- (2) 犬のように、気温が変化しても体温をほぼ一定に保つことができる動物を()動物、ヘビのように、周囲の温度の変化にともなって体温も変化する動物を()動物という。
- (3) タンパク質が分解されて柔毛から吸収される栄養分は何か、また、この栄養分は柔毛から吸収された後、ある器官に運ばれて、その中で貯えられたり別の物質はつくり変えられたりする。ある器官とは何か
- 生物の細胞と生殖
- (1) カエルのように、雄と雌がかかわってふえるふえ方を何生殖というか。
- (2) 卵の核と精子の核が合体すると、何ができるか。また、卵や精子をつくるとき、染色体の数が半分になるような細胞分裂が起こる。このような分裂を何というか。
- 自然と人間
- (1) 植物、バッタ、カエルのように、食べる・食べられるという関係のつながりを何というか。
- 科学技術と人間
- (1) オゾン層は、太陽から発するある光を弱めるはたらきがある。この光のことを何というか。
- (2) 大気中の二酸化炭素量が増加することによって、地球の平均気温が上昇してきている。このことを何とよぶか。

4 地学分野

- 地層のでき方を知る。

岩石が温度変化や水・大気の影響で、表面から崩れていくことを（ ）という。このとき、流水のはたらきは、岩石をけずりとる（ ）・運ばん・運ばんしたものを積もらせる（ ）があげられる。このようにして、砂や泥が海底などに堆積してできる岩石を（ ）といい、粒の大きさや堆積物の種類によって分類することができる。

- 地層からわかる過去のようすを知る。
 - (1) ふつう、下の地層ほど（ ）い。
 - (2) 凝灰岩の地層が堆積した当時、近くで（ ）活動があった。
 - (3) 地層が堆積した当時の自然環境がわかる化石を（ ）化石という。
 - (4) 地層が堆積した年代がわかる化石を（ ）化石という。
 - (5) アンモナイトは（ ）代に広い範囲で繁栄した生物である。

- 火山と地震について知る。
 - (1) マグマが地表に流れだしたものを（ ）といい、それが冷やされてできた岩石を（ ）岩という。
 - (2) すべて大きな結晶できている深成岩のつくりを（ ）組織という。
 - (3) 地震が発生したとき、はじめに起こる小さなゆれを（ ）といい、あとに起こる大きなゆれを（ ）という。
 - (4) 地震のエネルギーの規模を表す尺度を（ ）という。

- 天体の動きと地球の自転について知る。
 - (1) 地球は、地軸を中心として、1日に1回（ ）しているので、天体は1時間に15度の割合で（ ）から（ ）へ動くように見える。
 - (2) 北の空の星は（ ）を中心として反時計まわりに回転しているように見える。
 - (3) 星や太陽が真南の位置にくることを（ ）という。

- 地球の公転、太陽系と惑星について知る。
 - (1) 地球の公転により、星が南中する時刻は（ ）ヶ月で約2時間早くなる。
 - (2) （ ）をかたむけたまま公転するため、季節が生じる。
 - (3) 太陽の南中高度が最も大きくなる日を（ ）という。日本では6月21日である。
 - (4) 太陽の表面にある（ ）は、まわりより温度が低いので黒く見える。
 - (5) 太陽などの恒星のまわりをまわっている天体を（ ）という。
 - (6) 金星は日の入り後の（ ）の空か、日の出前の（ ）の空に見える。

安下庄高校が求める英語の力

1. 単語

□ 教科書巻末の WORD LIST の太字の単語を読み書きでき、意味が分かる。

□ 動詞の活用を覚える。

① **規則動詞**：過去、過去分詞が規則的に変化。原形に **-ed** をつける。（例：play – played – played）
（その他：study – studied – studied, stop – stopped – stopped）

② **不規則動詞**：過去、過去分詞形が不規則に変化。→ **教科書巻末の不規則動詞変化表**
（例：begin – began – begun）

2. 文法

□ **be 動詞**

現在形	(is, am)	→	過去形	(was)
現在形	(are)	→	過去形	(were)

[I] am (was) a student.
[He , she, It] is (was) a student.
[You, We, They] are (were) students.

(例)

 He is a student.
 He isn't a student.
Is he a student? Yes, he is. / No, he isn't.

□ **一般動詞**

(現在) (主語が I, You, We ,They)

 I play tennis.
 I **don't** play tennis.
Do you play tennis? Yes, I do. / No, I don't.

□ **一般動詞**

(現在) (主語が He, She, It)

 He plays tennis.
 He **doesn't** play tennis.
Does he play tennis? Yes, he **does**. / No, he **doesn't**.

※ 例外 have → has study → studies teach → teaches

□ 一般動詞 (過去)

He played tennis yesterday.

He **didn't** play tennis yesterday.

Did he play tennis yesterday? Yes, he **did**. / No, he **didn't**.

※ 過去形に ed をつけない動詞 (不規則動詞) もあるので、これは覚える必要がある。

(例) go → went

(I go to school **every day**.)

I **went** to school **yesterday**.

I **didn't go** to school **yesterday**.

Did you **go** to school **yesterday**?

□ 現在進行形 (今~している) **be 動詞 (is, am, are) + 動詞の~ing 形**

I **am** playing tennis now.

I **am** not playing tennis now.

Are you playing tennis now? Yes, I am. / No, I'm not.

※ 過去進行形 (～していた) は、be 動詞を過去形にする (is, am → was, are → were)

(例) I **was** playing tennis then.

※ be 動詞を除いて、動詞の ing 形を用いて、後ろから名詞を修飾する形がある。

The boy **is** playing tennis. (その少年はテニスをしている。)

The boy playing tennis (テニスをしているその少年)

The boy playing tennis is Tom. (テニスをしているその少年はトムです。)

□ 受け身 (～される) **be 動詞 (is, am, are) + 動詞の過去分詞形**

This book **is** written in English.

This book **isn't** written in English.

Is this book **written** in English? Yes, it is. / No, it isn't.

※ 過去分詞形は過去形と同じく ed をつければよいが、そうでないものもあるので覚える必要がある。

※ 受け身文を過去にする場合は、be 動詞を過去形にする。

(例) This book **was** written ten years ago.

※ be 動詞を除いて、動詞の ed 形を用いて、後ろから名詞を修飾する形がある。

The book **is** written in English. (その本は英語で書かれている。)

A book **written** in English (英語で書かれた本)

This is a book **written** in English. (これは英語で書かれた本です。)

□ 関係代名詞 (who - 人, which - 物, that - 人・物)

関係代名詞を使って後ろから名詞を修飾することができる

This is **a book**. I bought **it** in America.

→ This is **a book which [that] I bought in America.**

(これは私がアメリカで買った本です。)

Ken is **the boy**. **He** came to see you.

→ Ken is **the boy who [that] came to see you.**

(ケンはおなたに会いに来た少年です。)

This is **the bus**. **It** goes to the park.

→ This is **the bus which [that] goes to the park.**

(これは公園行きのバスです。)

□ 完了形

have has } + 動詞の過去分詞

① 「ずっと～している」 (for (～間), since (～以来) とともに用いる)

I **have studied** English **for** two years. (私は2年間ずっと英語を勉強しています。)

② 「～し終わった」 (just (ちょうど), already (すでに) とともに用いる)

I **have just studied** English. (私は英語の勉強をちょうどし終わった。)

③ 「～したことがある」 (ever (今まで), never (1度も～ない) とともに用いる)

I **have ever studied** English. (私は今までに英語を勉強したことがある。)

Have you **ever** studied English?

※ I **have been to** Tokyo. (東京に行ったことがある)

I have not **been to** Tokyo. (東京に行ったことがない)

Have you ever **been to** Tokyo? Yes, I have. / No, I haven't. I have never been there.

□ 不定詞

to + 動詞の原形

- ① I go to school **to swim**. (～のために) (私は泳ぐために学校へ行く。)
- ② I have no time **to swim**. (～のための) (私は泳ぐための時間がない。)
- ③ I like **to swim**. (～すること) (私は泳ぐことが好きです。)
- I like **swimming**. (～すること) (私は泳ぐことが好きです。)

※ 動詞の ing 形で、「～すること」という意味がある。(動名詞)

※ like の後は不定詞、動名詞どちらが来ても良いが、enjoy, finish, stop などの次には動名詞しか使えない。

- | | | | | |
|-----|---|----------------------------|---|-----------------------------|
| (例) | { | ○ I like to swim . | { | × I enjoy to swim . |
| | | ○ I like swimming . | | ○ I enjoy swimming . |

※ 逆に want は不定詞しか使えない。

- | | | |
|-----|---|----------------------------|
| (例) | { | ○ I want to swim . |
| | | × I want swimming . |

□ 疑問詞

- | | | | | |
|---------|--------------|------|------------------|-----------------------|
| (何) | What | is | this? | It is a pen. |
| (だれ) | Who | is | this? | It is Ken. |
| (だれの) | Whose | are | these pens? | They are mine. |
| (どちらが) | Which | is | Ken? | This is Ken. |
| (いつ) | When | is | your birthday? | It is August13. |
| (どこに) | Where | do | you live? | I live in Tokyo. |
| (なぜ) | Why | do | you study? | To go to high school. |
| (どのように) | How | does | he go to school? | By bus. |

□ 助動詞

- ① **can** (～できる) He **can** play tennis. (彼はテニスをすることができる。)
 - (～してもよい) **Can** I play tennis? (テニスをしてもいいですか。)
 - ② **may** (～かもしれない) He **may** play tennis. (彼はテニスをするかもしれない。)
 - (～してもよい) **May** I play tennis? (テニスをしてもいいですか。)
 - ③ **will = be going to** (～だろう, ～するつもりだ)
 - I **am going to** play tennis tomorrow.
 - I **will** play tennis tomorrow.
 - ④ **should** (～すべきだ) You **should** play tennis.
 - ⑤ **must = have to, has to** 「～しなければならない」
 - He **must** play tennis. = He **has to** play tennis.
 - must ≠ don't have to
 - He **must not** play tennis. ≠ He **doesn't have to** play tennis.
 - (してはいけない) (しなくてよい)
- ↓
- Don't** play tennis. (～してはいけない, ～するな)

□ 接続詞

① **if** (もし～ならば)

If you are free, please help me.

Please help me **if** you are free.

(もし暇なら、手伝ってください。)

② **when** (～するとき)

When I go home, I will call you.

I will call you **when** I go home.

(家に帰ったら、電話しましょう。)

③ **because** (～なので、なぜなら～だから)

Because it was raining, he didn't play tennis.

(雨が降っていたので、彼はテニスをしなかった。)

He didn't play tennis **because** it was raining.

(彼はテニスをしなかった、なぜなら雨が降っていたからだ。)

□ 代名詞

～は	～の	～を	～のもの
I (私は)	my (私の)	me (私を)	mine (私のもの)
you (あなたは、あなたたちは)	your (あなたの、あなたたちの)	you (あなたを、あなたたちを)	yours (あなたのもの、あなたたちのもの)
we (私たちは)	our (私たちの)	us (私たちを)	ours (私たちのもの)
he (彼は)	his (彼の)	him (彼を)	his (彼のもの)
she (彼女は)	her (彼女の)	her (彼女を)	hers (彼女のもの)
it (それは)	its (その)	it (そのもの)	×
they (彼(女)らは、それらは)	their (彼(女)らの、それらの)	them (彼(女)らを、それらを)	theirs (彼(女)らのもの、それらのもの)